

---

# 葱間・トリップ

黄玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葱間・トリップ

### 【Nコード】

N6856Y

### 【作者名】

黄玉

### 【あらすじ】

「葱?」「葱だね」「葱ですね」「葱だよ」  
ネギまの二次です。

主人公は相変わらずのチート能力を持って、ネギまの世界にトリップ。

主人公は原作知識薄い、というか皆無。

やっと、大戦編に突入出来ました。

## 第零話（前書き）

続編みたいなものです。

楽しんで読んでもらえたら幸いです。

## 第零話

「手続きが完了したよ」

「ああ……………やっとか。」

「随分お疲れのようだね」

「何があつたか知ってるだろうが。」

「ははは、当然じゃないか」

「……………くたばれ。」

「冥界は今、ギゼン君が統治してるんだよ？  
全くハデスやヘルにイザナミは何をしてるんだか」

「お前の地位がいまいち解らんのだか？」

「すごいーく偉いと思つてればいいよ」

「そうかい。」

「しかし、ギゼン君は遅いね

冥界の仕事がある程度片付けてるから仕方無いのかもしれないけど  
.....」

「ギゼンは神の領域に踏み込んでるのか？」

「踏み込んでる処か、どつぷりと浸かってるよ」

「俺は？」

「君もだよ

それに、色んな神の加護を受けちゃってさ、僕の能力要らないんじゃない？」

「ミーちゃんの剣も神剣にまで昇華させたしなあ。」

「『や』

『久しぶり』」

「お久しぶりです。」

「来たね」

「二人とも久しぶり。」

「じゃあ、君たち三人を送るよ  
送る先はネギマという物語の世界  
全員、原作に関わりを持たせるから、原作ブレイクとか気にしなくていいよ」

「ネギマ？」

「細かい説明は面倒だから省くけど、なんとか対応してね  
それじゃ、行ってらっしゃい」

パカッ

地面に穴が空くが

「……………（バサバサバサバサ）」

「そいえば、飛べたね  
でも、どーん！」

結局は落とされたよ。



## 第一話（前書き）

主人公は死んでいないので、転生ではないですよね？

## 第一話

どうも、カズキだ。ただいま現在進行形で墜ちている。

神が手を施したのか羽で飛ぶことが出来ないのだからただ墜ちているのだ。

しかし、落下時間が長い。

もう、三分程墜ちているだろう。

成層圏から落とされたのだから当然かもしれないが……

ぼんやりと墜ちていたら携帯が鳴った。

「メールか……何々？」

【from、神

ごつめーん（詫）

ちよーっとだけ時間軸間違えちゃった（笑）

君たちを中生代それも三疊紀の終わり、ジュラ紀始まり位に送っちゃった（笑）

御詫びにそっちの世界で生まれる筈の魔法書とか魔法球とか魔法発動体とか送ったから活用してね（爆）

じゃ、がんば（哀）】

.....」

ジュラ紀.....

人類の出現が大体450万年前.....ジュラ紀の始まりが2億年前.....

「ネギマってどんな物語なんだ？」

ドゴーン!!

どうやら、地面に墜落したらしいな。

「よつと」

地面には小規模のクレーターが出来てしまったが、体にはなんの問題もないな。

「さて、これからどうするか。」

辺りをみるとシダ植物やイチョウ等の裸子植物で被子植物は見当たらない。

「どうやら、本当に古代らしいな。」

ズシン　ズシン　ズシン

「恐竜か…？」

地響きをたてながら現れたのは、逞しい後ろ足、鋭い爪と牙、明らかに俺を捕食する気満々の瞳を持つ肉食恐竜。

「イビ　ジョーって…こんな感じだったなあ」

異世界初の遭遇者が肉食恐竜なんだから現実逃避ぐらいさしてくれよ。

「GYAOOOOOOOOOOOOOOOOO」

「はぁ………」

神剣を抜いて、イビル　ヨーの首を一斬で切り落とす。

「恐竜……旨いのかな？」

そこらの石を錬金術で調理台にして、木を集めて赤火砲で火をつける。

「尻尾でいいか？」

尻尾を輪切りにして調理台に二つ並べる。

「そろそろ焼けたかな？」

木を錬成して造った箸で恐竜の肉をひっくり返しながら啜く。

「いただきます」

食べてみれば、少し筋っぽく固いが食べれないほどではないな。

味も悪くないな。

「ごちそうさまでした」

恐竜肉も結構いけるな。

さて、本格的にどうするか？

「とりあえず、魔法書やら魔法発動体やら魔法球やらを確認してみるか」

しかし、ギゼンやアンラは何処にいったんだ？

同一箇所にとばされるとは限らないから仕方無いのか？

ぼっちとか言うなよ。

はっ、変な電波をした。

これが魔法書だな。

内容は……………

魔法の詠唱内容と魔法名、後簡単な効果説明が系統ごとに書かれていた。

「魔法の発動には発動体が不可欠である……この指輪がその発動体か。」

先ずは初心者用の呪文から……この世界の魔法に必要な魔力を感じることからだな。

「ごほん……えー……プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ、」

「まあ、最初だしな……プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ、」

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ！」

「プラクテ・ビギ・ナル、火よ灯れ——！！！！！」

「プウラアクウテエ・ビギ・ナルウ『火よ灯れ————!!!!』」

『.....』

もう嫌だ。

「よし、目先を変えてみよう。」

「プラクテ・ビギ・ナル『風よ』」

『.....』

「プラクテ・ビギ・ナル『風よ』」

『.....』

「プラクテ・ビギ・ナル『風よ!!』」



「……………」

これもか……

「ザケル」

手からちゃんと雷撃が放たれた。

「……………」要練習だな。」

幸い時間は腐るほどある。

魔法球の方は……取説付きか。

「えー…何々？」

中に物を入れる。

人も入れる。

外と中との時間差をある程度いじれる。

中は結構広い。

中は魔力が満ちているので魔法の練習にオススメ。  
太陽もある。

地形もある程度なら変えられる。

入ろうと念じれば大体オツケー。

e t c、e t c。

詰まる所、収納球だな。

野球の硬球位のサイズだけど……… 入るのは後でいいか。」

確認も終わつたし、まずは拠点となるところ探さなきゃな。

水場の近くで、雨も防げる。

洞窟でも探すか。

目的も決まつたし。

この世界では自分の好き勝手に面白おかしく暮らさせて貰おうかね。

ほとんど不老になってるしな。

「あ、マスターとアネリアさんからもらった餞別まだ見てねえや。」

マスターの方は………これは隊長羽織？しかも長袖。

背中には鐘をモチーフにした福音の鐘のギルドマーク。

「これは凄いな。」

早速着てみる。

「サイズぴったりだな。

アネリアさんのは、っと。」

着流し

「こっちを先にあけるべきだったな。

しかし、二つでワンセットか。いつ示し合わせたんだ?」

サイズはこっちもぴったりでした。

## 第一話（後書き）

主人公に魔法の才能はありません。

時間を掛ければ極める事は出来ますが、あくまで才能は全てにおいて凡人並みです。

## 第二話（前書き）

原作が程遠い。

## 第二話

「結局使えたのは影と無だけか。」

あれから練習を重ねること千数百年。

影属性と無属性は極める所まで究めてしまった。

のだが、それ以外の属性はうんともすんとも反応しなかった。

「これも才能なのかね？」

影属性は自分の影を媒介にして影に形を与える魔法だ。

影を槍にすることも使い魔にすることも出来る。

無属性は身体強化や念話、飛行、治癒、等々出来る万能属性であるが、基本属性で大概誰でも使える属性だ。

「魔法球も改造もとい、改装し終わつたし……恐竜や始祖鳥を捕まえて、中に入れておくか……絶滅させるのも勿体無いし。」

魔法球の中はかなり広く、それを街エリア、草原エリア、丘陵エリア、密林エリア、沼地エリア、雪山エリア、砂漠エリア、洞窟エリア、遺跡エリア、火山エリア、渓谷エリア、古塔エリア、海辺エリアに分けている。

現在、古塔エリアにはフェニを海辺エリアにはレヴィを放している。

何を入れてもあの二体がその主になるだろう。

そうと決まれば、世界中を回りながら生態系に配慮して恐竜達を魔法球に入れ続ける。

「あ、アンモナイトも入れとこ。

……海中の生物は面倒だな。」

恐竜を集めたり、植物を集めたりしていて思った。

「一人だけは退屈だ。」

そこで。

「七つの大罪の結晶と義骸技術と錬金術を注ぎ込み人造人間ホームンクルスを創る

ことにしました。」

思考が変だとか思わないでくれ。

数千年も一人だけだと、気が狂いそうになるんだ。

「じゃ、ちゃっちゃつと済みますか。

えーと、材料も錬金術で錬成して魔力で代替に出来るものはして、  
そうだ、俺の血を使うか。

で、義骸が出来たらそれに結晶を入れて、俺の血を使いながら馴染  
ませて……………完成！」

ふふふ、後は目覚めるのを待つだけだな。

「…ん、……………ああー。」

最初に起きたのは強欲か。

「おはようございます。親父殿。」

「おはよう。『アヴァリティア』」

「それが俺の名かい？」



「そうだよ、アヴァリティア」

「ふむ、気に入った。これからよろしくな。」

「ああ、よろしく。」

「ん、」

「起きたか。」

それから、順番に皆起きていった。

名前は、  
暴食が、グーラ、  
憤怒が、イーラ、  
怠惰が、アーセディア、  
傲慢が、スペルビア、  
嫉妬が、インウィディア、  
色欲が、ルークスイア、  
強欲が、アヴァリティア、  
だ。

彼らの紹介は後々、機会があることにしよう。

そして、新たに仲間が出来て一億数千万年。

俺は毎日、恐竜の保護や皆と修行しながら過ごしていた。

するとある日、地球に巨大隕石が落下してきたのだ。

あれは、ホントにビックリした。

震度8以上あるんじゃないかと思う程に揺れたし、ものすごい高さの津波も襲ってきた。

俺達はそれでも無事だったが、魔法球に入れた以外の恐竜は絶滅してしまった。

自然の摂理として仕方無いと思い見ていることしかしなかった。

隕石は何か使い道があるかと思い、一応採取しておいた。

恐竜が滅んだ所で、時間は変わらず進んで行く。

隕石が落下してから更に数千万年。

やっと、人類が誕生した。

まだ、猿人の段階だが、ここからは脅威的なスピードで進化していかだろう。

つまり、今は大体450万年前だな。

今の俺と同じ人類が出現するのは後、440万年。

今までの歳月に比べたらなんてことないな。

型の反復やあいつらとの組手や模擬戦で時間を潰すか。

それに魔法球の中の恐竜も地形によってかなり独自の進化を遂げちゃったんだよな。

魔力が満ちている空間だったのが影響してるのかもしれないが、今度ちゃんと調査しなければ。

「と言うわけで、やって来ました。魔法球！草原エリア！」

「突然どうしたんですか？父上。」

「ああ、スペルビアか、気にするな言いたくなっただけだ。」

スペルビアは見た目普通の子供だな。

戦闘は影の魔法と闇の魔法を使う後衛タイプだな。

性格もまともだし傲慢の要素はあまりない。

「それで父上は何をしに来たんですか？

魔法球の管理は僕とイーラに任せてもらってるはずですけど。」

「あれ？アーセディアは？」

ここの管理は三人に任せただが？

「アーセディアなら洞窟エリアの最奥ですつと寝てます。

まあ、いてもいなくても同じなので僕としてはどうでも良いんですがね。」

「そうか。それで大丈夫なら別に何も言わないけど。

俺が来たのは、この魔法球内で生物がどんな進化をしたかを見に来

「ただよ。」

「そうですか。」

「なら、そろそろ来ますね。」

「何がだ？」

「この草原エリアの王ですよ。」

スペルビアが言い終わった時、日差しが遮られた。

見上げると翼を大きく広げた姿。

太陽に反射して煌めく紅い鱗。

「リオレウス……」

「あれが、このエリアの支配者ですね。」

「ファイアドラゴンの方が迫力あるな。」

「えっ？」

「えっ！」

「なにそれ怖い。」

「他のエリアも見て回るか。」

「それでは僕はこれで、まだ生態系が安定していないエリアもあるので、基本見るだけにして下さいね。」

「そんなぐらい分かってるよ。」

「イーラにもよろしくな。」

「はい、失礼します。」

影に沈みながら転移する。

「さて、次は久しぶりにレヴィに会いに行くかな。  
なんだかなであいつが一番付き合い長いし。」

そういや、あいつってインウィディアと相性最悪なんだよな。  
嫉妬繋がりか？

属性も両方水と氷だし。

「フェニはイーラとやたら仲良いんだよな。  
古塔で飲み会することもあるらしいし。  
鳥と人間なのにな。」

さて、影転移を発動してと。

また、数百万年程の中で隠居しながら暮らすのもいいか。

レヴィも魔法を扱えるし、魔法戦闘に慣れとくのもありだな。

この魔法書に書いてないことにも挑戦するか。

この世界には気と云うものもあるみたいだし。

アーセディアは完全に気だけみたいだし。

気と魔力でなんか出来ないかな？

まあ、これから考えればいいか。

## 第二話（後書き）

ホムンクルス登場

容姿はハガレンと同じと思ってきてくれて良いです。



### 第三話（前書き）

やっと原作キャラ登場です。

### 第三話

どうも、カズキです。

今は中国は黄河にきています。

いやあ、やあっと各地で文明が発達してきました。

そして、文明が発達してきたのを期に、俺もそろそろ名字を考えてみようと思う。

こっちでは、きっちりフルネーム名乗りたいしな。

うーん…カズキは愛着も出てきたしなあ……………

……よし！

‘七々己 一希（ななななみ かずき）’にしよう。  
決定。

俺は今から七々己一希だ。

「名前の話はこれまでにしてと、黄河文明以外の文明の様子も見たいし。」

武装錬金“サテライト30”」

三十人に別れて世界中に散る。

今や“サテライト30”は完全に思考を分断することが出来るし、思考や記憶を共有することも出来る。

ついでに言うと、魔法球の管理を頼んだ三人以外の人造人間も世界を転々としていたりする。

時々出会えば、しばらく行動にしてまた別れるの繰り返しだ。

皆出会う度に能力や魔法の扱いが強く、巧くなってるんだよね。

「まあ、良いや。

これから人類がどうするかゆっくり見させてもらおうかな。」

俺は見物しながら魔力と気の合成の強化をしとこ。

具体的には、テレズマ霊力や天使の力を混ぜてみている。

二つだけを合成させるのは比較的簡単なんだが、それが三つになると途端に難しくなる。

「はあ……儘ならないものだな。」

そんなこんなで練習するのに、千年単位を使つてると、突然。

「……異界が創られたのか？  
それかなり大規模なものが。」

こんなことが出来る人間が現れるとはな……面白い。  
行ってみよう。

デスクロール  
解空を使い、空間に裂け目を生み出し、そこを通つて異界に移動する。

「  
到着。」

「ここ……これは……位相が少しずれてるが……火星だな。  
しかし、よくこんなもの創ったな。俺でも一からは無理だわ。」

「貴様！ 何者だ！？」

「ん？」

いきなり話し掛けられて何かと思えば、全身が黒いヒラヒラで覆われている変な奴がいた。

「何者だ！？…と言われてもだな…：…いたって普通の一般人だが？それに人に名前を聞くときは自分から名乗るべきではないか？」

「…確かに魔力は一般人のそれとは変わらないが…：…ここ（・・）に人間が存在していることがおかしいのだ！」

「そんなに变か？  
なんとなくて来れたけど？」

「ふざけるな！！」ウオガッ

うわぁ、すっげえ複雑な魔方陣を一瞬で構築しちゃったよ。

「答える、貴様は何者だ。」

質問のはずなのに疑問符が付いてない。命令ってことですね。

「答えぬか……ならば仕方無いな」ドッ

魔方陣から物凄い魔力密度の光線が放たれる。

「はぁ……七々己　一希だ。

初めて名乗るんだから……覚えとけよ。黒ローブ！」

こっちも影の槍で迎え撃つ。

俺と奴との中間で激突し込められていた魔力が爆発する。

爆発で視界の悪いうちに瞬歩で近付き、影で作った剣で斬りかかる。

ガキン「っ！　堅っ！」

なんだよ、この馬鹿みたいな強度の魔力障壁。

剣がまるで届かなかったよ。

「（スッ）」

黒ローブの手の動きに合わせて構築されていく魔方陣。

属性もない只の魔力だが、量と密度が半端じゃない。

「おっと」

うーん……近付いても魔力障壁で防がれて、離れれば魔方陣からの集中放火……あの障壁さえ抜けければ、届くんだが。

「千の影槍」

イメージは集約

「影の大槍」

数枚は破れたか……けどまだ、足りないな。

影の使い魔を出して、多方向からの同時攻撃。

その直後に

「万の影槍

集約

影の巨槍」

一点集中攻撃

「ぬう……」

槍が腕を掠めた程度だが、確かに届いた。

なら、そこを基点に攻めていくか。

「まだだ！」

黒ローブが手を複雑に動かすと……弾幕の密度が増えました。

「戦いの旋律二倍速」

俺自身の速度を上げる。これは所謂、当たらなければどうと言っているのではない。だな。

痛つ、くそ、普通に当たっちゃった。

右腕が<sup>ズ</sup>消し飛んだ。“ボキユ”とか云って消えたよ、“ボキユ”だぜ。



あ、でも。

「なんだ、その魔力は……………」

魔力が一気に四倍になっちゃった。テヘッ。

うん、キモいな。自分でやって吐き気がしたよ。

仕方ないんだよなあ、いくら魔力制御が上達しても封印具を付けなきゃ、垂れ流しになってるんだし。

魔力が馬鹿みたいに多いとこれはこれで苦勞するんだよ。

贅沢な悩みかもしれないけどな。

まあ、良いや。

せっかくこの状態になったんだから、この状態でしか使えない、影の接近戦闘最強奥義でも使うかね。

「黒衣の葬送曲」

俺の背面に影で編まれた人形が現れる。

サイズは俺の1/5倍程で、俺と同じデザインの黒い羽織と着流しを着て、顔には十字の模様が入った白い仮面を付けている。

「さあて、せつかく出したんだ。  
少しは楽しませろよ。」

「なめるな!!」

15分後

「ま、こんなもんだな。」

「ぐ……お……」

片腕はなくなっているが、普通に立っている俺と倒れている黒ローブ。

勝敗は言わずとも解るよな？

「結局のところさあ、お前名前何て言うんだ？」

「……………造物主……………と名乗っておこう。」

ライフメーカー

「ふーん、造物主ねえ……………一応覚えとくとするよ。  
久しぶりにまともに戦えて楽しかった。  
じゃあな、怪我也死ぬほどじゃないし、安静にするなり魔法で治す  
なりすりや大丈夫だろ。」

デスクロール  
解空を使い、地球に戻ろうとする。

「待て！ 貴様は何者だったんだ！」

「名前を教えてやっただろ。  
それだけだよ。」

次に造物主が何かを言う前に解空に入って移動する。

「あの者……………七々己 一希と云ったか……………一体何者なんだ？」

その疑問が解決するのは3000年後になるのだった。

## 地球

「しかし、中々強かったなあいつ。  
これから先、あのレベルの人間に何人出会えるかな？」

超速再生で腕を生やしながら笑う俺の姿は、端から見ればかなり怪しかっただろう。

### 第三話（後書き）

#### 第四話（前書き）

今回は少し長め。

そして、久しぶりのあの人も登場。

## 第四話

数百年かけてようやく魔力、気、霊力、天使の力、テレズマを全て合成することが可能になった。

可能になったのだが……

「きよ、強力過ぎる。」

前方は地面が抉り取られ悲惨な状況になっている。

「只の正拳突きでこの威力か……絶対人には使えないな。  
はあ、これも封印か。」

やっていいのは魔力と気の合成までだな。

霊力と天使の力は質が違いすぎて難しいが、その分威力がヤバイ。

「ふうー……」

一段落して、大きく息を吐き出す。

最近、記憶の共有をしたときにキリストが産まれたことが分かったから、今は大体西暦0年だな。

「はあ…早くパソコン使いてえ…………いくらハイスペックでもこの携帯じゃ限界があるよ…」

余りにも永い年月を生きると、どうしても娯楽に飢えてしまう。

携帯のアプリの将棋、囲碁、チェス、麻雀、等々。

ボードゲームはCPのレベルを最高にしても簡単に勝ててしまうので飽きてくる。

もちろん、アンサートーカーなんて使っていない。  
素の能力で勝ててしまうのだ。

「何か暇潰しを考えないとな…………」

とりあえず、地球一周でもしてみるかな。

今は日本だから、北に真っ直ぐ行ってユーラシア大陸。その後は北



極。北アメリカ大陸だな。

「行ってみるか。」

ゆっくり世界を見て回るかな。

.....

あれ？ あの船は日本のじゃねえか？

あの船も中国……いや、この時代なら漢か……に向かうんだろうな。

俺は霊子を足場にしてその上を歩いてるからな、あっちから見えることはないだろう。

ついでだし、ついていってみるか、無事にたどり着けるか、見てみたいし。

うん、普通に着いたね。そこまで大きな嵐にも時化にも遇わなかったし。

はあ……つまんね。

しゃあね、ここから北極にでも行い。

人類最初に北極点に到達してやる。

……

北極にいる生物も魔法球に入れたし、北極点に到達もしたし、このまま南？に行くか。

北アメリカ大陸辺りに行けるだろう。

……

北アメリカ大陸では、マヤ文明が大分発達していた。

その中でも、優秀な人達を引き抜いて魔法や錬金術を教え魔法球で生活してもらうことにした。

これで魔法球内はかなり発展するだろう。

そのまま、地続きの南アメリカ大陸に渡った。

アマゾン川流域のジャングルをさ迷ったり、アンデス山脈にあるインカ帝国に訪れたりした。

インカ帝国では医学が進んでいたのも、また何人が引き抜いた。

俺自身は医学は必要ないのだが、魔法球内の人口も増えて来たので、医学の発達は不可欠だと思ったからだ。

あ、それからイースター島にも行ったな。

まだ、モアイ造りの最盛期だったみたいで島民総出で造ってたな。

俺も翼を出した姿でモデルにされたし。

イースター島の民族とも仲良くなり、しばらく経ったが周りの人間が段々年をとっていったので、俺はこの島を去ることにした。

不老と云うのは辛いな。

仲良くなった人間もすぐに年老いてしんでしまう。

次に向かったのはオーストラリア。

コアラでも抱っこしに行こ。

.....

コアラ可愛いよ、コアラ。

はあ……癒されるわあ。

やたらでかいコアラとかもいたけど。

と、コアラはこれまでにして、アボリジニの人達ともあったし、エアーズ・ロックにも行ってみた。

中々のサイズがあつたな。  
見応えがあつたわ。

オーストラリアで見るものはこれぐらいかな？

珊瑚礁なんざ、昔から見飽きてるし。

次はアフリカにでも行くかな。

.....

やって来ました南アフリカ。

そして、見渡す限りの砂漠！

「さてさて、人はどこに　っ！！」

なんだこの魔力は造物主と同じかそれ以上だぞ、そんなものが突然現れたのか。

「あつちか……」

なんなのか、気になるし行ってみるか。

## 転生者SIDE

俺は転生者だ。

突然死んだかと思えば神にチート能力をもらいネギまの世界に転生した。

もらった能力はナギの1000倍の魔力にラカンの1000倍の気。  
さらに無限の剣製。  
不老化だ。

今は原作開始の1000年前だが、これから好き勝手に生きて原作キャラを奴隷にしてハーレムを作ってやるぜ。

先ずは能力を試してみるか。

ん？ 向こうから何か飛んでくる？ 丁度良い。能力の実験台にし

てやるぜ！

一希SIDE

膨大な魔力を放っていたのは一人の男だった。

赤い外套を身に纏った、浅黒い肌の白髪の男。

身長は俺と同じぐらいだな。

「なんだあ？ てめえも転生者か？」

醜く口を歪めながら話すが、顔の筋肉がその動きに慣れてないのか、筋肉が引き攢っている。

「……………転生者なんて者では無いな。」

「はあ？ そんな成りしておいて普通の一般人です。とか言つつも  
りかあ？

この時代にてめえみたいな格好の奴が居るわけ無いだろ。」

「それは偏見だな、世界中を回ってみろ。

世界の何処かにはこの服装の集落があるかも知れないぞ？」

「けっ、もういいよ。

てめえには俺様の能力の実験台になってもらうぜ！

<sup>トレス</sup>  
同調・開始<sup>オン</sup>」

男の手に握られるのは、黒と白の双剣

「仕方ないな。」

俺も剣を抜くが構えはしない。なんとなくだが、構える気になら  
ない。

「何をしているだ！」

「？」



「さっさと降りてこい！」

「飛べよ……………」

「飛べるわけ無いだろうが！」

いやいや、そんな魔力も気もあるんだから舞空術位使えるだろうが。

それに強気で言えることでも無いだろ。

「はああー……………」

ぎゃーぎゃー騒いでいるのが可哀想になり、地面に降りてやる。

「そうだ、それで良いんだよ。」

いちいちイラッとさせてくれるなこいつ。

年上に対しての礼儀を教えてやるか。

「『ちよ～～～～と待った！！』」

「……………」

「今度はなんだよ……」

いつも、突然、いきなり、前触れも、予兆もなく現れて場を乱す存在。

ギゼンが来た。

「『どうも』」

『いつも』

『突然』

『いきなり』

『前触れも』

『予兆も』

『なく現れて場を乱す存在のギゼンです』」

「僕もいますよ」

「『そうだった!』」

『アンラちゃんも居ます!』」

「今回は何しに来たんだ?」

一応、今からあの無礼な奴に礼儀を教えてやろうとしたんだがな。

「『久し振りなんだからそんな邪険しないでよ』

『何年振りかなあ』

『君に会うのも』

『大体一億年と九千飛んで十五年と六十七日三時間二十八分四秒振りだね』

『その間に君なんて自分でフルネームなんて決めちゃうしさあ』

『だから』

『僕も自分の名前決めちゃった』

『君には負けたく無いしさあ』

『あ』

『それは今更かな?』

『それでもアンラちゃんと相談して決めたんだよ』

『君みたいに一人で自己満足で決めたりなんかしてないよ』

『ははは』

『嫌だなあ』

『嫌味で言ってるんじゃないよ』

『一人で決めるしか無い状況だったなんて思って無いからね』

『一人で寂しい奴だなあなんてこれっぽっちも思って無いから安心してね』

「分かった。もう良いから。落ち着け。」

「『落ち着け?』

『僕は落ち着いてるよ』

『何時何時も冷静じゃないか』

『ねえアンラちゃん』

『僕は何時も冷静沈着だよな?』

「そうですね。何を言ってるんですかカズキさん。」

俺か?俺が悪いのか?

「さっきから俺様を無視して何をこちゃこちゃやってるんだよ!」

「『……………何あれ?』

『アーチャーのつもり?』」

「ギゼンさん。アーチャーって何ですか?」

そうだ、何処かで見たと思ってたらあの運命のゲームに出てきた五次のアーチャーだ。

「『アンラちゃん』

『あのアーチャーはただのフェイカーだから気にしないで良いよ』

『真正正銘の贗者だよ』」

「なんだとてめえ!!  
贗者かどうか分らせてやろうか!!」

双剣で斬りかかるフェイカ!

「『そうだ』

『僕の名前はさあ』

『やつざき八咲 ぎぜん偽善』

『にしたから』

『よろしくね』

『アンラちゃんも』

『あんら八咲 安楽』

『に改名したから』」

「俺は知ってるかもしれんが一応言とつくけど、七々己 一希だから。」

まあ、よろしく。

それと、そろそろ後ろ危ないぞ。」

「もう、遅せえよ!!」

「『虚刀流“牡丹”』」

「が……………!?!」

強烈な後ろ回し蹴りが決まった。

「『障壁は張ってるみたいだね』  
『一撃は無理だったよ』」

「く、 I am the bone of my sword、  
（我が骨子は捻れ狂う）」

「何か、凄く魔力を籠めてますよ。」

「大丈夫だよ。心配するだけ無駄だ。」

「偽・螺旋剣？（カラドボルグ）」

中々の爆発が起きたな。

まあ、<sup>オリジナル</sup>原典は全部偽善が持つてゐるからな。所詮は紛い物だ。

「死んだか……………？」

「『やられたよ……………』」

『まさかここまでやるとはね』  
『僕の想像以上だ』」

煙が晴れた先にいた偽善は、全身ボロボロで立っているのがやっとの状態だった……………なんてこともなく、無傷でピンピンしていた。

「そっちよりもこっちのが被害がでかい。」

演出かしらんが、風で砂埃をこっちに吹き飛ばしやがって。

「『冗句はこれまでにして』」

『分かったかい？』

『これが君の実力だよ』

『残念ながら』

『君じゃ僕らには勝てやしないよ』」

「まだだー!!」

往生際が悪いなあ、正直飽きてきた。

「I am the bone of my sword  
体は剣で出来ている」

Steel is my body, and fire is  
my blood, 血潮は鉄で心は硝子

I have 「虚刀流“薔薇”」 「ちえるのぶっ！」

「そらそうなるわな。」

敵の目の前で悠長に詠唱するなんて、攻撃してください。と言っよ  
うなもんだ。

63

「『馬鹿だね君』

『隙だらけだよ』

『そんな詠唱待つけないだろ』」

「そこは空気読めよ!!--」

「『は』」

『やれやれ仕方無いねえ』

『さっさと詠唱しなよ』」



「よし！」

I am bone of my sword  
出来ている  
体は剣で

(そこからやるのかよ。)

Steel is my body, and fire is  
my blood  
血潮は鉄で心は硝子

I have created over a thousand  
blades  
幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death  
なく  
ただの一度も敗走は

Not known to Life  
れない  
ただの一度も理解さ

Have withstood pain to create  
many weapons  
彼の者は常に独り剣の丘で勝  
利に酔う

Yet, those hands will never hold anything                      故に生涯に意味はなく

So as I pray “unlimited blade works”                      その体はきつと剣で出来ていた」

詠唱が終わると炎が広がり世界を侵食し書き換えていく。

地面は荒野となり無数の剣が突き刺さり、空には巨大な歯車が回っている。

「ひやははは！！                      これでお前らも終わりだ。」

「『なんで？』」

「ああ？                      解らねえのか？今からお前を襲うのは無限の剣。剣戟の極地だぞ。」

お前に勝目なんてあるわけないだろ！」

「『そうなんだ』

『それは困った』

『うーん……どうしようか？』」

「今、土下座して、ごめんなさい。許して下さい。と言えは命は助けてやるぜ。」

「『ごめんなさい』

『許して下さい』」 O T Z

したよ、即行で。

「ぶつ、ははははは！！ そうだ！ 分かれば良いんだよ！」

偽善の土下座をあつさり信じて、固有結界を解いた。

「それじゃあ、お前には俺様の奴隷にでもなってもらおうかな？」

「『それは嫌』」

「は？」

「『虚刀流最終奥義』」

「え？」

転生して、簡単に力を得て、有頂天になって、気を抜きすぎだな。

「『七花八裂・改』」

虚刀流の七つの奥義を“柳緑花紅” “鏡花水月” “飛花落葉”  
“落花狼藉” “百花繚乱” “錦上添花” “花鳥風月”の順  
番で同時に繰り出す。

「きゃー！ かつこいい！」

「『ありがとう』  
『アンラちゃん』」

「おい、生きてるかー？」

「……………ピクピク」

「……………返事がない、ただの屍のようだ。」

しゃあない、天界にでも送っとくか。

「……ふん！……これでよし！」

ちゃんと、天界までとどくだろ。

「今、投げましたよね？」

「で、偽善。お前は何しに来たんだ？」

「無視ですか」

「『軽く報告をね』」

『僕ら「完全なる世界」<sup>「スモエンテレケイア」</sup>に入ったんだ』

『それと』

『軽く原作のヒントをあげようと思ってね』

『今から400年後』

『ヨーロッパで戦争が起こる』

『そこに面白い存在がいるから行ってみたら？』

『後』

『今から970年後には絶対に魔法世界に居てね』」

「さつきから、気になってるんだが、“原作”ってなんだ？」

「『んー』」

『それは教えない』

『その方が面白そうだし』」

「まあ、良いや。

最初に神さんが物語とか言ってたし、それ関係だろ。  
俺にはこの世界が現実だしな。」

「『それも真実かもね』」

『じゃ』

『そろそろ行こうかアンラちゃん』」

「久しぶりなのにもう良いんですか？」

「『一応』」

『僕らも組織に所属してるしね』

『時間は大切にしなくちゃ』」

「そうか、ま、頑張れや。」

「『うん』」

『頑張る』

『じゃあね〜』」

「失礼します。」

俺も手を振って返す。

「『あ!』」

『最後に一つ』

『暇だったらでいいから日本のここにあるものを気に掛けてくれな  
い?』

『土地の名義は僕の物になってるけどこれを見せたら大丈夫だから』  
「

「暇だったらな。」

「『じゃ』」

『バイバイ』」

嵐が去ったな。

「そんじゃ、ヨーロッパでも目指してのんびりと行ってみるか。  
400年もあるみたいだし。」

それよりも問題は転生者だな。

上級神レベルから能力をもらったのなら、俺にも対処出来るだろうが、能力によっては面倒になるだろうな。

周りにも影響が出るだろうし。

「はあ、厄介だな。」

神にも連絡しておこ、厄介事を増やさせないようにしないと。



#### 第四話（後書き）

これでストックが切れました。

次話まで少し時間がかかります。ご了承ください

## 第五話（前書き）

原作レギュラー登場です。

さて、誰が登場するでしょうか。

## 第五話

偽善との再会から、400年。

あいつの言っていた面白い存在とやらが気になりヨーロッパに来ている。

「しかし、寒いな。」

アフリカの砂漠の次に真冬の欧州は気温差が酷い。

「それに……ここもか……。」

どうやら、最近ヨーロッパで戦争が起きているようで、荒れて亡ぼされている町をよく見る。

「人間はホントしょうがないな。こんなことを何度も繰り返して。」

「う……あ……。」

「声？ ……生き残りが居るのか？」

瓦礫をどけて、声の本を探す。

「居た。おい、大丈夫か？」

瓦礫のしたに居たのは、傷だらけの少年。  
金髪の…まだ5、6才の少年だった。

「だ…れ…？  
…な…に…？」

「喋るのは無理か、安心しろ、すぐ治療してやる。」

「あ…りが…とう……………」

気絶したか、　気が抜けたんだろ。

「　治療”」

ホワ…と光が出て少年の傷を癒していく。

「…………ふう、これでひとまずは大丈夫だな。」

外に寝かしておく訳にはいけないので、比較的まともな家のベッドに寝かせる。

まだ生き残りが居るかもしれないから、探査で村全体をさらってみる。

しかし、反応はなくこの村にはこの子しか居ないようだ。

「避難している可能性もあるが、この少年が唯一の生き残りだな。」

気になる所も幾つかあるけどな。

それは今はいいだろ。

少年が目を覚ました時のために、なんか作つといてやるか。

お粥で平気かな？

ヨーロッパの病人食がなにかなんて俺も作者も知らないし……。

「んう……あれ、ここは……」

「起きたか。」

「ひい、誰ですか貴女は？」

めっさ怯えられているのはなんでだ？

それにニュアンスがおかしかったような？

「落ち着け。……かくかくしかじか……という事があったんだ。」

「あ、それは助けて頂いてありがとうございます。」

「それで、腹減ってるか？

お粥作っただが。」

「え、そんなそこまでしても（ぐうー）ら……」

「持ってくるよ。」

「すみません……」

お粥を小鉢に入れてスプーンと一緒に渡してやる。

「熱いからゆっくり食べよ。」

「これはオートミールですか？」

「お粥」

「おかゆ……ですか……えっとそれじゃあ食べさせてもらいます。」

最初はおそろおそろ、二口目からは普通に食べてくれた。

「ありがとうございます。おいしかったです。」

「ん、お粗末様でした。」

それで聞きたい事が幾つかあるんだが………いいか？」

「………はい。大丈夫です。」

「とりあえず、名前は？」

俺は七々己 一希……こつち流じゃ、カズキ・ナナナミか。」

「はい、ぼくは、ライナです。」

……ファミリィネームはありません……。」

「ライナ……ね、ファミリィネームが無い理由は聞かない事にするよ。」

助けた時にライナだけで近くに死体が一体も無かったからな。

昔に両親が死んだか、捨てられたか……

「じゃあ次の質問だ。」

この村が壊滅しているのはなんでだ？

それに生き残りは他にいると思うか？」

「この村がこんなになったのは盗賊に襲われたからです。」

盗賊はまほ……不思議な力を使って村を壊して金目のものを奪っていききました。

あいつらは徹底的に殺そうとしていましたから、多分生き残りはいないと思います。」



言い直したが、不思議な力は魔法だろうな。

魔法使いがこんな小さな村を襲ったのか。

「ライナは……魔法について知っているのか？」

「　　っ！！」

知っているようだが、様子がおかしいな。

「俺も魔法については知っているし、色々なモノも見てきている。  
何を言っても多分大丈夫だぞ。」

ライナは俯いたまま動かない。いや、肩が小刻みに揺れている。

迷っているようだな。

「………僕は……魔眼持ち………なんです。  
アルファ・ステイグマ

“複写眼”………という魔眼を持つてゐるんです。

開眼したのは三年前、………僕が三歳の時です。

その時に、頭の中にこの眼の事や………魔法について………他に  
も様々な情報が流れ込んで来たんです。

最初は特別な力だと嬉しかった………でも………この力は異常だった

んです。

この眼を見た両親は…僕を気味悪がるようになって……捨てられました……。信じられないことかもしれませんが……僕が魔法について知っているのはこういう訳です。」

絞り出すように訥々と語るライナ。

三年間、一人で過ごしてきたんだな。

孤独の辛さを知っている身としては、その痛さが分かりすぎる位分かるな。

「そうか。分かった。  
それじゃ最後の質問だ。

ライナ。 お前はこれからどうしたい？」

「……………どうとは？」

「俺と一緒に来るのもよし。

近くの村で普通に暮らすもよし。

その眼を知っても気にしない奴らの所で暮らすもよし。だ。

決めるのはライナ。自分自身だ。」

こついう選択は自分で決めないと意味がない。

人に決められた道を進むのは楽だが、進歩には繋がらないからな。

「僕は……………」

……………

「そろそろ行くぞ。」

「はい」

結局ライナが選んだのは俺と一緒に来ること。

旅をしながら俺がライナに魔法や戦い方を教えることになった。

魔法に関しては複写眼があるから教えることは少ないし、戦い方を特に近接戦闘について重点的に教えよう。

「楽しくなりそうだな。」

「お、お手柔らかにお願いします……。」

どうしたんだ？ 冷や汗なんか流して、俺は優しい先生だぞ。 ク  
クク……

「……………早まったかも……………」

……………

うん、アルファ・ステイグマ複写眼ってヤバイね。

一回魔法を見ただけで、その構成を理解して自分のものにするなんて。

ま、その反動でやたら眠くなるようだけどな。

試しにガツシュに出てくる術を見せてみたら、普通に理解してたかな、中級は一つ見ただけでぶっ倒れて眠っちまったけどな。

ここら辺はゆっくりとやっていくしかないな。

幸い、ライナにもまだまだ時間はあるんだし。

そんな感じで、ヨーロッパ各地を回っていたら、至る所で魔女狩りが行われていた。

大概は普通の人、あるいは魔法使いだったので、火炙りになる前に助け出して逃がすか、魔法球に入ってもらった。当然、ライナに魔法を見せてからだが。

もう、魔法球内は人種のサラダボウル状態だ。

「何時の時代も人間がいる限り世界平和なんてあり得ないのかな。」

木の十字架に藁束、眼下で火炙りの準備が着々と進められている。

「いやぁー！！ 離してえ！！」

「うるさい！ 魔女が！」

「先生……」

「あぁ……」

大概是普通なんだが……

「見たか？」

「はい、あの子は人間じゃありませんね。」

ライナの眼には朱の五方星が浮かび上がっている。

複写眼で見ただろう。

「はぁ、無害そうだし、一応助けるか。  
それと、多分だがライナのが年下だぞ？」

「……………そうですか？ 見た目10才ぐらいですけど…」

「お前はまだ、8才だろうが。」

「……………“眠りの霧”」

この魔法って属性が水だから俺は使えないんだよな。

「全員眠りました。」

「よし、助けるか。」

手枷を外して、眠ってる幼…………少女を抱える。

「これって知らない人が見たら犯罪者じゃね？」

「人を殺したことがある時点で犯罪者ですよ。」

「あれは正当な過剰防衛だよ。」

「子供に見せる殺し方じゃありませんでしたよ。」

ジト目で見てくるライナ。

「起きる奴も出てきそうだから行くか。  
向こうの森まで行けば大丈夫だろ。」

ライナを置いて瞬歩で移動する。

「ちょっと待って下さいよ先生。  
僕まだ瞬動しか使えませんよ。」

.....

森の中に一軒のログハウスを建て終わった頃にやっとライナが追い付いてきた。

「ぜえ.....ぜえ.....」

「遅いぞ。」



「なんで……わざわざ……こんな奥で……魔力まで完全に抑えて……途中にフェイクまで置いて……」

「いや、ただこの家を建てる時間稼ぎをしたかっただけ」

「十分程しか稼げてないですよね!？」

「建てるのは三分で終わったぞ。」

フェイクを作るのに時間掛かっちゃった。

ライナは少し複写眼に頼り過ぎてるからな。

それを直してやりたい気持ちと純粋な悪戯心が混ざった結果だ。

「とにかく中に入るぞ。」

お前も限界が近いだろ?。」

「なら先に寝かせてもらいます。」

「二階の奥の右な。」

「定位置ですね。」

なんか、ライナの定位置になった二階の右奥。

由来はなんだったか？ うん、忘れた。どうでもいいな。

「この子も寝かしとくか。

一階にベッドでも作ればいいな。」

にしても“眠りの霧”の効果ってこんなに長かったか？

少女 side

「じいどじい？」

たしかわたしは火炙りになりそうなときに突然眠くなって、でも今はベッドの上にいる…………

「もしかして…………ここって天国？ わたし死んだの？

…………ええ…………！！」

「どうした？」

扉から入って来たのは不思議な髪の色をした綺麗な女の人。そして何よりもその背中には真っ白な羽が生えていた。

あ、わたしやっぱり死んだんだ。

この人は天使かな。

「おーい、大丈夫かあ？ 帰ってこーい。」

—希side

「おーい、大丈夫かあ？ 帰ってこーい。」

助けた少女が目を覚ましたのは、あれから三日後のことだった。

突然叫び声が聞こえたからライナとの修行を中断して駆け付けた。ライナには自主トレを命じておいたが。

「は！ わたしは死んだんですか！？」

「いや、生きてるけど。」

「生きてるんですか！」

「一先ずもちつけ…違った、落ち着け。はい、深呼吸。」

「スー…ハー…スー…ハー」

ふう…落ち着きました。

えつとわたしを助けてくれたんですね？」

「ああ、その通りだ。お嬢さん。」

「む、わたしにはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという名前があります。お嬢さんはやめてください。」

「おっと、それは失礼。」

俺は七々己 一希、こっち流じゃカズキ・ナナナミだな。

カズキでもナナナミでもナツチーでもお兄ちゃんでも好きに呼んでくれ。」

「じゃあ、お兄…ちゃん？」

「ぐはあ！ー！」

「吐血ー！」

「と、悪ふざけはここまでにして。」

吐血？ そんなものはしてないよ。

「聞きたいことはあるか？」

「えっと……なんで助けてくれたんですか？」

「誰かを助けるのに理由が要るのか？  
要るんだったら適当に考えるが。」

「わたしは………人間じゃないんですよ………」

「それが？」

「え？」

「はぁ……俺が人間に見えるか？  
羽が生えてるこの俺が。」

「えっ……………それは……………」

悩んでるようだな。俺のことを認めてしまえば自分は人間じゃないと認めるようなもんだからな。

「ふむ……おい、ライナー！　ちょっとこーい！」

「え、えっ、え？」

「なんですか先生？」

「こいつはライナ。  
ちょっと、お前に聞きたいことがあってな。」

「？」

「俺はなんだ？　お前が思うことを素直に言ってみろ。」

怒ったりしないから。」

「えっと、それは……鬼？ 悪魔？ いやむしろ魔王？」

「よく解った。」

ライナ。」

「はい。」

「明日の特訓5倍な。」

「えゝ！？」

ピキッ、という音が聞こえたように石化した。

「まあ、俺は人間じゃないわな。  
ならなんだ？ と問われても答えることは出来ないけど、とにかく人間ではない。」

「……………」

「けど、別に人間とそこまで……結構違うけど……まあ、うん、なんだ。あれだ。  
俺らと来るか？」

「いきなりですね。」

「いや、めんどくさくなつて来たんだよ。  
あ、ライナは魔眼持ちだけど人間だぞ。多分……」

「わたしは吸血鬼ですよ。」

「わりとそこはいつでも良いんだよ。」

思い返してみるけど。

「俺って人外の知り合いが多いんだよ。  
だから、人間だろうが無かろうがあまり関係無いんだ。」

「変わってますね。」

「よく言われる。」



「ついていって良いんですか？」

「いいよ。」

「軽いですね。」

「重くすることでも無いからな。  
おし、ライナ！ 起きろ。歓迎パーティーでも開くぞ。  
準備を早く済ませたら特訓を普通に戻してやるぞ。」

「了解したであります。サー！」

「エヴァンジェリンもこい。  
こっちの事情も説明してやるぞ。」

「あの……展開が突然過ぎて追いつけないんですけど……」

「「慣れる」」

吸血鬼の臂力って凄いね。  
ある程度訓練しているライナを簡単に吹き飛ばしたよ。

俺には効かなかったけど。

追伸

歓迎パーティーを始める頃にはエヴァ（こう呼んでいいと言われた）も諦めたのかテンションを上げて楽しんでいた。

俺もテンションが上がって酒まで出してしまった。

エヴァが一番酒が強かったのには納得がいかないが。

ライナは一杯でぶっ倒れた。

## 第五話（後書き）

ライナは伝勇伝のライトとフェリスを足して割った感じを想像してもらえれば合うと思います。

## 第六話（前書き）

時系列が分からない。

魔帆良学園って近衛 近衛右門が造ったのか？

関東魔法協会って魔帆良と同時期？

そこら辺は独自解釈でやっています。

ご容赦下さい。

## 第六話

ライナと出会い。

エヴァと出会い。

あれから、数百年が過ぎた。変わったことと言えば。

ライナが不老になった。

これは単純、ライナが15才の時に突然不老になった。  
既に二人も不老者がいるから大した問題にならなかった。

エヴァがチャチャゼロという殺戮人形を造ったり、オリジナル魔法を創ったこと。

これは、エヴァが守られるだけは嫌だと努力した結果だ。

俺達全員が賞金首になった。

額は

俺・1700万\$

エヴァ・600万\$

ライナ・100万\$

エヴァを狩ろうとする馬鹿どもや、やたら正義のため正義のためと言っ魔法使いを殺していたらこうなった。

最後は、俺達に変な通り名が着いた。

俺は「天使の羽持つ魔王」「影統べる女王」「破壊の皇帝」「無差別魔法使ってるけど隣の奴が一番被害出てる」等々

エヴァは「魔王の娘」「人形使い」「闇の福音」「不死の魔法使い」等々

ライナは「魔王の従者」「哀愁漂う愚者」「睡眠を求める者」「えっと、ドンマイ」等々

さすがに賞金稼ぎや正義馬鹿がうざくなってきたので、偽善が言っていた、日本に行くことにした。

二人が居ることだし、久々にフェニを喚んで認識阻害全開で飛んで行くことにした。

「火の鳥に乗ってるのに熱くないというのも不思議な感覚だな。」

「……………ZZZZZZ」

「エヴァ、口調が荒れてきてるぞ。」

「いいではないか、これも父様やライナの影響だ。」

「ああ…………あんな可愛かったエヴァが何故こんなことに…………今でも十分可愛いけどな。」

「な！いきなり何を！」

「ソナ会話ハヤメテクレ、聞イテルコツチガ気恥ズカシクナル」

「チャチャゼロか、会話に入るのは珍しいな。」

「マアナ、ソレヨリ旦那斬ラセテクレヨ」

「解った。やっぱ黙ってる。」

話す度に斬りかかれたら面倒くさい。

「…………嫌なわけではないんだが…………心の準備が…………ブツブツ」

「おーい、エヴァー、帰ってこーい、お前それ多いぞー。」

「は！ 私は一体何を！？」

「そこはもう良いんだ、気にするな。」

「む、そうなのか？」

「ああ、そうだ。」

そこからもとりとめのない話をしながら飛ぶこと数時間。

日本にようやく到着した。

場所は関東方面と目印の巨樹しかわかってないが、一目で分かるほどあり得ないサイズの巨樹らしい。



「…………あれだろうな。」

目の前にあるのは200mを優に越える巨樹。

それにただ大きいだけじゃない。

「父様……この樹の魔力……」

「ああ、中々の内包量だな。

ライナ、起きろ。

ちよつと、この樹を視てみる。」

「ええ」

寝惚け眼だが、その眼には朱の五方星が浮かび上がっている。

「うーん、確かに凄い量だね。エヴァや、ましてや僕なんてまるで及ばない量だね。

でも、先生の全力とならいい勝負しそうですね。」

俺の全力といい勝負か……今の状態でエヴァより少し少ない位だから、かなりの量だな。

右手のリストバンドで三倍、左手で四倍、限定解除を二重掛けして  
るから五倍の二乗。計三百倍になるからな。

「よし、気に入った。  
ここに家を建てよう。」

「相変わらずいきなりだな。」

「用事済んだんならまた寝ますね。」

「今回は武家屋敷風にするぞ。土地の許可もこの書類があれば大丈  
夫だろ。」

「800年前の書類だけど……………」

「何でこの書類は一切劣化してないんだ？」

「俺は家を建てるから、エヴァは結界を頼む。ライナも微調整を手  
伝ってやれ。」

「複写眼なら構成を一瞬で理解出来るからな、無駄を探すのは楽なん  
だ。」

こんな樹が人間に見つかれば利用されるだけだろうからな。

守るは言い過ぎでも、変に知られない方が良好だろ。

「父様、認識障害と侵入感知位でいいか？」

「後弱めでいいから人払いも居るかな、魔力の供給は俺がやるから俺とリンクするようにしといてくれよ。」

「分かった。ほら、ライナさっさと働け。」

「うー、あー、だりいー。」

「………… あっちは大丈夫そうだな。  
こっちもちゃっちゃと終わらすか。」

……………

「出来たな。」

「疲れた。」

「お休み。」

結界の術式は簡単だが、何せサイズがサイズだ。

術式を刻むのが大変だっただろ。

「さあ、新居に入ろうか、引っ越し祝いに和食でも食うぞ。ライナも寝るなら中で寝ろ。」

「わしよく？ それはどんな食べ物なんだ？」

「うーん……引っ越しだから蕎麦は外せないかな……後は白米とか味噌汁とか……天ぷらや寿司も和食なのかな……寿司は流石に無理だな。いや、刺身ならあるいは……それと天ぷら蕎麦……天井もありかな……煮物は時間もかかるし……食材と相談かな……ま、見て食べてのお楽しみだな。」

「そうか……ふむ、楽しみに待っておく。」

「おう、期待して待つてろよ。」

結果、夕食は中々豪勢で楽しく食べました。

夕食後、少し今の日本について話し合った。

「どうやら、日本では陰陽術が発達しているようで魔法は殆ど使われていないようだ。」

つまり、俺達の情報はこの国には届いてないと思う。」

俺達を追い回していたのは、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）がメインで、たまにバンパイアハンターみたいな賞金稼ぎが来るくらいだったしな。」

「しばらくは静かに暮らせるとのことだな。」

「エー、ツマンネエナア、斬ラセテクレヨオ」

「エヴァ、チャチャゼロへの魔力供給を止めておけ、話しに入らねるとややこしくなる。」

「すまないが父様。」

魔力供給を絶つても動けないだけで喋る位は出来るんだ。」

「ケケケ、残念ダツタナ旦那」

仕方ない、消音の術式を刻んだ袋にでも入れておくか。

「チヨ、ナニスンダ旦那、ご主人助ケテクレヨォー

」

「静かになつたな。

えっと、どこまで話をしていたんだっけか。」

「ここまで情報が来てないから静かに暮らせるといふところまでだな。

」

「おお、そうだった、そうだった。

続きを話すぞ、静かに暮らす事は出来るだろうけど、この国では俺らの容姿は目立ち過ぎるんだ。」

「……………それだけか？」

何言っただこいつ？　みたいな目で見られた。

「それだけって、結構重要なものだと思うぞ。」

「国が違ふんだし、見た目の違い位あるだろう、それに今さら見た目程度がどうした。」

その位、魔法で変えれば良いだろう。」

「それはそうなんだが……それで良いのか？」

「幻術で黒目黒髪に変えれば良いだろう。  
人前に出るときはそれで十分だ。  
もし、万が一が起きても軽く記憶操作すれば問題はないだろう。」

「むう……はあ……人前に出るときは幻術の徹底。  
これは絶対にしないとな。  
後は臨機応変になんとかしていくか。

……ちよつと待てよ。  
エヴァ、日本語は分かるのか？」

「……………翻訳の魔法でなんとか……………」

「そんな魔法教えたか？ それとも創ったのか？」

「ぐう……………これから創る。」

「はあ……………先ずはそれからだな。  
俺も協力するからすぐに完成させるぞ。  
最悪、会話だけ出来れば良いんだし、日本は識字率は高くないから

それでも大丈夫だろ。」

「はい」

「ライナは……後で一回見せたらいいか。」

アンサートーカー  
答えを出す者を使い、エヴァに説明、改良を行い、二時間で翻訳魔法を完成させた。



## 第六話（後書き）

チャチャゼロが書きづらい。それにエヴァのキャラが安定してない。

二次小説は難しいと今更ながら痛感している作者です。

## 第七話（前書き）

今回は修行パートと次話への繋ぎです。

## 第七話

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック氷の精霊299頭。集い来たりて敵を切り裂け。『魔法の射手・速弾・氷の299矢』」

「影布三重対魔障壁」

障壁一枚の破壊に大体魔法の射手100矢。

障壁は全て破壊されたが、矢は一矢も届かなかった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精、闇の精、闇を従え吹けよ常夜の氷雪。『闇の吹雪』」

「影布八重対魔障壁」

強力な吹雪と暗闇が発生し、障壁を破壊しながら襲い掛かってくるが、全ては破壊しきれずに吹雪は消えてしまう。

「くっ、これかも……なら、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

いきなりどうも、今はエヴァと模擬戦をしている。

ただし、ハンデとして、

こちらからの攻撃なし。

こちらは移動してはならない。  
がある。

まあ、制限時間が設定してあるので、それまでにこちらにダメージを与えたらエヴァの勝ち。  
ノーダメージなら俺の勝ちだ。

「……………解放・固定『千年氷華』」

エヴァの詠唱が終わったようだ。

詠唱っていいよな、影魔法には詠唱がないんだよ

いつそ、俺がオリジナルで創ろうかな？

「掌握！術式兵装『氷の女王』」

魔法そのものを取り込むエヴァオリジナル技法。  
闇の魔法。

取り込む魔法によってその能力、効果は変わる。

この魔法の効果は俺も知らないからな。

様子見も兼ねて。

「影布百重対魔対物障壁最高硬度」

「えゝ！？」

制限時間一杯かけてようやく十枚だけ破壊出来たとさ。

「うう……あれはひどすぎる。」

「落ち込むなって、効果が解らない時は何よりも警戒しろって教えてただろ。」

それを実践してるんだよ。」

「それでもあれは無いぞ、父様の障壁は堅すぎるんだ。」

「はいはい。　　まだまだエヴァに負ける気は無いからな。」

まあ、真祖の魔力や筋力等のスペック頼みの戦闘じゃなくなってきたからな、自分の闘い方を確立しているしちょっとやそつとじゃ負けやしない。それこそ造物主クラスを連れてこなければ負けないだろう。

「そういえばライナは？」

あいつ最近訓練をサボるようになってきたんだよな。

なんか「睡眠至上主義に目覚めたから寝る！！という訳でお休み。」とか宣言してから至る所で寝てるんだよ。

気配遮断も異様に上手くなって俺でも見付けるのに苦労するし、エヴァでは見付けることも出来ない。

「ライナだったら魔法球にいると思う。ほら、父様が私達に渡した個人用の……………」

「そうか……………」

確かライナは魔法球の時間設定を現実の二時間を魔法球内では一週間にしていたな。

「エヴァ、二時間で戻る。」

「あ、ああ……」

後で聞いたがこの時の俺の顔はとても黒かったらしい。

所変わって魔法球内。

陽射しは暖かく気持ちよい、辺り一面の草原には二本だけ木が立っている。

その二本の木にはハンモックが繋がれており、そこで眠っている金髪の顔立ちの整った青年。

「ラアアアイナくううん」

「うわっひゃあ!! あ、うわ!!」ドスン

ハンモックの上で文字通り飛び起き、そのまま地面に落下した。

「いてて、せ…先生……どうしたんですか？」

「修行」

「いや、そんな、もう修行なんて……必要無いじゃないですか。」

「ほお……そうかそうか、自分は今十分強いから、これ以上強くなる必要はないと………そう言うことか？」

「別にそう言う訳では………」

「言うな言うな、それだけ自分に自信を持つてるのは大したもんだ。」

「いや………その………あの………」

「しかし、それだけ自信があるんだったら、俺も自分の力を試してみたいな。もちろん、全力で………」



右手のリストバンドを外そうとすると。

「すいませんでした！」

「よし、分かれば良い。

次したら一週間耐久サバイバルするぞ。」

耐久サバイバルは一定期間、俺が隙を見つけては石かナイフを投擲する訓練だ。

一瞬たりとも気を抜かず、見えない相手を警戒し続ける緊張状態で過ごすかなり過酷な訓練だ。

もちろん、怪我ですむ加減でちゃんと狙って投げてるぞ。

「うう……僕に優しい世界は無いのか……」

「無ければ作れ、あるいは俺を超えろ。」

「そんな無茶な……」

「さつさと始めるぞ。これが終わればいくらでも寝させてやるから。むしろ、終わっても意識が残ってるなんて期待するなよ。」

刃引きされた剣を三本取り出してライナに二本渡してやる。

「左剣に『魔力』

右剣に『気』」

「気と魔力、反発する二つを同時に扱うか、どうせなら合成させれば更に強力になるのに。」

「まずは剣術だけで行きたいですから………ねっ!!」

ガギン

ライナが突っ込み、気を纏った剣で斬りかかる。

「剣速は変わってないな。けど、前より軽くなってるぞ」

「はあああああ!!」

二振りの剣で袈裟斬り、切り上げ、切り払い、こちらに攻撃の暇さ

え与えないような連激を繰り出してくる。

「速さや連携は良いんだが、やはり、軽いな。

ただでさえ、片手振りで軽いんだからそこを埋める工夫をしないと、気と魔力の合一をさえ。

出力不足を補うには今のお前にはそれしかないだろ。」

話している最中も攻撃は続いていたが、言い切った時にライナがバツクステップで距離をとった。

「はあ…はあ…『魔力』『気』『合成』」

剣の腹をクロスするように合わせるとライナの体を光が包み込む。

気と魔力の合一。

気と魔力を融合させ、体の内外に纏い強大な力を得る高難度技法。

魔力や気を直接見えるライナとは相性が良いと思い教えたが、ここまでのレベルにするとは。

「行きます！」

「おし、来い！」

ガギギイン

「むう。」

剣速も上がっているが、重さは段違いだ。

何だかんだ言っていていじめてみたが、こいつは剣だけでもかなり強くなってるな。

気と魔力の合一を使ってる時はバランスが崩れるから魔法は使えないが、前衛で十分やっていけるな。

「今度はこっちから攻めるぞ。」

剣に魔力を纏わせて、瞬動を使いライナが十分知覚できる速度で接近する。

「くっ……！！」

キン

「え？軽っ？」

「影のフェイクだ。」

「後ろ！」

キン

「そっちもだ！」

ドカツ！

「かはぁ……………」

正面から斬りかかったフェイク、後ろに回り込んだフェイクの二つの攻撃は防げたが、フェイクの影に隠れていた俺の本体には反応仕切れなかったようで、もろに後ろから攻撃を受けた。

「正面から不意を撃つ。実力が開いたりしていても案外あっさり勝てるかもしれないぞ。」

ま、この手は複写眼を使われればお前には通用しないけどな。」

「ぐ……………卑怯者……………」

「おいおい、相手の不意を衝くのは戦闘の基本だろ？  
如何にして相手の隙を衝くかが勝利への道だ。」

「なら……スイミン・アンミン・バンザイ風精召喚・剣を執る戦友」

「その始動キーは代えた方が良いと言ったはずだろ……」

一応説明しておく、始動キーは自分の専用の魔力通路の鍵になる、その設定には儀式が必要だが変更することもできる。

「始動キーは置いておいて、風の中位精霊による複製……それを20体の同時召喚か……」

「時間稼ぎを頼む。」

ライナの姿をした精霊が、槍、片手剣、大剣、双剣、大鎌等、様々な武器を持って襲ってくる。

「スイミン・アンミン・バンザイ契約に従い、我に従え、高殿の王。来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻」

「やっべ、詠唱完成さしちゃった……」

精霊は全て倒したが、その間に詠唱を終わらせられた。

「『千の雷』！！」

超広範囲雷撃殲滅魔法で雷系最大呪文、千の雷。  
数えきれない程の雷が降り注いでくる。

まともにくらうと流石に少し痛いので、俺も翼を広げ、紋様に魔力を籠める。  
すると、紋様は金色に輝き始め、俺の前には複雑な魔方陣が展開される。

「“バシレイユ・ビオレゲンス”」

魔方陣から、多数の光線が放たれ、ライナの『千の雷』と拮抗する。

「うわああああ！！ それはホントに卑怯だあああああああ  
！！」

拮抗したのも僅かな時間で後はあっさりと光線に吞まれていった。

「……………もう、のんびり眠ってて良いぞ」

ついつい、力加減を間違えてしまった。

“バシレイユ・ビオレゲンス”が止んだそこに残っていたのは黒焦げの何かだった。

「殺ってしまったか……………?」

「う……………あ……………」

「うん、生きてるな。」

でも、これ以上は可哀想かな。

しばらくはこいつがどうするかに任せるか。

俺としては造物主と勝てないまでも互角か、最低限逃げ切れる程度の実力は身に付けて欲しいんだが……………それは高望みか？

「はあ……………成るようにしか成らないか。」



ライナに治療を施して魔法球から出る。

中にいた時間は数時間だったが、外ではまだ十数分しか経っていなかった。

「ずいぶんと早かったな、父様。  
二時間じゃ無かったのか？」

「ああ……………ちょっとだけ、やりすぎた。」

「それは……………御愁傷様だな。」

一応は生きてるぞ。

「楽しくてつい、な。ホントについ、だが。“バシレイユ・ビオレ  
ゲンス”を使った。」

「あれを使ったのか……………」

エヴァは顔を引きつらせながら続ける。

「あれは魔力を使っているから魔法なんだろうが、恐らくあれを超える魔法なんて存在しないんだぞ。」

ライナの複写眼でも構成を読み取れないらしいし。」

そりゃ、元が天使の使っていた魔法だからな。

人間に理解しきれるモノじゃないだろ。

「……………エヴァは……………」

「ん？」

「エヴァはどこまで強くなりたい？」

「…それは……………父様に守られるだけではなく、父様やライナを守り一緒に戦える位になりたい。」

はつきりと自分がどうなりたいかを答えるエヴァ。

見た目十才の女の子が言うのもどうかと思うが、そこまで決めているなら大丈夫だろう。

「ライナは抜かれるかもしれないな。」

「何か言ったか？ 父様。」

小声で言ったつもりだったが、エヴァには少し聞こえていたようだ。

「何でもないよ。」

言ったことを誤魔化すようにエヴァの頭を撫でてやる。

エヴァも特に抵抗もせず、目を細めて気持ち良さそうに撫でられている。

和むわゝ

因みに俺達の実力は

俺 偽善>>>安楽>>>(越えられない壁)>>>造物主>>>>  
>>ライナ エヴァ

位かな。

ライナとエヴァは種族と魔眼の違いで微妙だが、技術や練度の点からすれば、ややライナの方が上だ。

この先、エヴァが修行を続けてライナがさばればすぐに入れ替わる

だろうが。

「む？」

結界から異変を感じたのでエヴァの頭から手を放す。

「どうしたのだ？」

「侵入者だ。」

## 第七話（後書き）

バシレイユ・ビオゲレンスはオリジナル魔法みたいな物です。

前作で使っていたのをそのまま使いました。

しかし、主人公は神からもらった能力を使いませんね。まあ、必要無いんですが。

## 第八話（前書き）

この話は悩んだ、とにかく悩んだ。

でも、出来があまりよくない。

ああ、文才が欲しい。

## 第八話

侵入者は初老に入っ と思われる外国人の男だ った。

最近 は明治維新だ なんとかで外国人も珍しくな ってきたからな。  
珍しいは珍しいか。

「何か用か？　ここは私有地 なんだが。」

名義は俺 じゃないけどな。

「私は貴方に交渉したい事 があ っ てこの地を訪 れました。話を聞い  
てもらえ ませんか？」

随分、流暢な日本語 だな。  
日本生活が長いのか。

それに話を聞く位なら良いか、他に気配も感じないし、俺達の賞金  
目当てでもなさそう だ。

「分かった。ついてこい、家まで案内する。」

俺はこの男を家の客間まで案内した。

「コーヒーと紅茶……緑茶もあるが…何にする？」

「すみません、紅茶をお願いします。」

「おいエヴァ、紅茶とコーヒー頼む。」

「了解、父様。」

「で、交渉というのは？」

「その前に自己紹介を、私は魔法協会の理事をしております、ロバート・メーデイスと云います。」

どうぞ、よろしく願います。」

頭を下げる外国人改め、ロバート。



「俺は七々己 一希だ。  
特にこれといった肩書きはない。」

「ご謙遜を私達の間で貴方の名を知らない者は居ませんよ。」

「……………なんの事だか良く分からんな？」

俺はそんな有名人でも無いんだが。

それよりも交渉の内容に入ったらどうだ？

あまり前置きが永いと……………こちら暇ではないからな。」

「すいません、ほんの冗談のつもりだったんですが、気分を害した  
のなら謝ります。」

どうか殺気を抑えて下さい。この老体にかなり辛いです。」

「そうか……………」

無意識だが、殺気が少し漏れていたか。

「持ってきたぞ、紅茶と……………コーヒーだったな。」

「ありがとうございます。」

「サンキュー、エヴァ。」

「……父様、私は部屋に居るぞ。」

「ああ、そうしてくれ。」

エヴァが部屋を出てから会話を再開する。

「さて……さつさと内容に入ろうか。」

魔法協会理事殿」

次ふざけた事抜かしたら殺す。と、暗に気配で示す。

「そこまで警戒しないで下さい。と言っても無理ですね。  
ごほん、実は今日はお願いがあつて参りました。」

「お願い？」

「はい、この土地を我々に貸して貰いたい。そして、出来れば譲つて貰いたい。」

「それは……俺の一存で決めれることではないな。  
少し待ってる。この土地の正式な所有者を連れてくる。」

ヘルメスドライブを使い偽善の居場所を探す。

「あ？」

「どうされました？」

「いや、何でもない。少し席を外すが待っていてくれ。」

探してみたが、どうやらあいつは魔法世界とも違う別の世界にいるようだ。

所謂異世界だな、流石にヘルメスドライブでは異世界間の探索は出来ても移動は出来ない。

仕方なく解空<sup>デスコレル</sup>で空間に裂け目を生み出し、そこを通って偽善のいる世界に渡る。

「……………やっぱり、世界移動は負荷がかかるな。  
早いとこ抜けよう。」

少し足を速めてこの空間を抜ける。

「到着。ここは………体育館か？

潰れてるみたいだから、廃校舎かなんかか。

ま、人が居ないならその方がいいが。」

ここまで来れば、ヘルメスドライブでも移動出来るな。

「あれ？ ヘルメスドライブに出ない？

どういう事だ？」

振ったり叩いたりしてみるがまるで反応がない。

「はあ…仕方ない。適当に探すか。

人を待たせてるからあんまり時間かけたくないんだけど………はあ………」

あ、霊絡を探すか、あいつの霊絡は色が黒いからな。  
すぐに分かる。

そうと決めれば、集中して霊絡を探す。

「数は少ないが、変な霊絡があるな。」

死神の霊絡とは違った赤い霊絡や橙色の霊絡、無色に限り無く近い灰色の霊絡。

黒い霊絡もその近くにある。

「あつちか、行くかな。」

霊絡を追うと、体育館から出て校舎へと入って行く。  
そのまま、階段を登って……

「こんな所に血が、まだ新しいな。」

階段の途中には血や爪、歯が落ちていた。

それでも構わずに登ろうとすると、上から狐のお面の被った男が下りてきた。

「何でそんな物を被ってるんだ？」

「さっき、人類最悪から盗んで来たんだよ。」

人類最強と人類最終の勝負に人類最強が勝ったから、人類最悪は賭けをしていた人類最低に殺されるんだ。  
だから、死ぬんだったらもう要らないかな？と思って盗んで来たんだよ。」

「ちょっと、待て。話がややこしくて分かりにくい。つまりはどういう事だ？」

「つまり、最強と最低と最終と最悪の揃い踏みだね。」

「おーけー。分かった。意味不明だ。」

それはそれとして、俺はお前に用事があったんだ。  
なんか、偽善、お前の土地を貸して欲しいって奴が居てな。  
その交渉を俺がするのもおかしいと思って呼びに来たんだよ。」

「へえ、そうなんだ。」

それにしてもよく僕を見つけられたね。」

「逃げ隠れするのが異様に上手い奴が居てな、その性だ。」

「ふーん……」

「もう良いか？」

良いんだったら、道を繋げるけど。」

「あ、うん。良いよ、繋いじゃっても。」

デスコレール  
解空を使い、家まで道を繋げる。

「行こうか。」

「そのお面は被ったまま行くのか……………？」

偽善が被ったままの狐面を指差しながら聞く。

「気に入ったからね。」

「……………そうかい。」

こういった時の対処法は心得ている。

無視だ。

偽善を無視して裂け目に入っていく、二人分の広さに作ったから行

きより負荷が大きい。

「到着……ふう……疲れた。

理事さん。こいつがこの土地の正式な所有者だ。  
交渉はこいつに頼む。」

「どうも、人類最悪の魔法使いです。」

「魔法協会理事をしております、ロバート・メーデイスです。此度はよろしく願います。」

うーん、理事にもなるとこのおかしな自己紹介にすんなり対応出来るもんなんだな。

狐面を被った学ラン姿の人物を目の前にして、落ち着いて応対するとは……。

まあ、面倒な交渉事は偽善に丸投げ……するのは不安だけど……して、俺は後ろで聞いとくか。

偽善と移動していた時に、俺の、ここに家を残しておきたい。という要望は伝えたしな。



「そ、そんなこと!!」

ドストドストドストス

偽善がとんでもないことでも言ったのか、大声を出すロバートだが、次の瞬間には顔の左右に一本づつ、胴の左右にも一本づつ、さらに足を固定するように二本。計六本のネジでロバートを動けなくしていた。

て言うか……

「ソファァーが穴だらけに………」

この家は武家屋敷だが、ヨーロッパ出身が二人居るから一部の部屋を洋風にしていた。

この客間もその一室だ。ちゃんと和風の客間もある。

今回は外国人の客だから、この部屋に案内したんだが………こうなるとはな……

「で、どうかな?」

「い、いえ、しかし………」

「（パチン）……………」

指を鳴らすと、偽善の後ろに出現する。武器の数々。

魔力を感知出来る者なら、武器の一つ一つに凄まじい魔力が込められているのが分かる。

「で、どうかな？」

これは交渉やお願いじゃないな、これは完全に脅迫だ。

「分かりました。その件、全力を持って取り組ませて貰います。」

「うん、よかったよかった。

じゃ、今言った条件を守るなら、この土地を貸してあげるよ。」

「はい……………」

交渉（脅迫）は終わったようだな。

条件が何かは聞いていないが、それは偽善が決める事だろ。

「それでは報告等も有りますので、私はこれで失礼させてもらいます。」

肩をがつくりと落として帰っていくロバート。

一体どんな無理難題を吹っ掛けたんだろ。

「さて、話し合いも終わったし、君たちもこのままここで暮らせるように言っただけから。」

「サンキュー、それは助かる。」

ところで気になってたんだけど、安楽は？

お前が独りなんて珍しいだろ、いつもはべったりのくせに。」

「ああ……安楽ちゃんね……今、ちょっと喧嘩してるんだ。」

魔法世界のある王国の姫様と仲良くしてたら嫉妬されてね……。お互い……冷静になるために少し距離をとってるんだよ……。」

「そうなのか……なんか……悪かったな、変なこと聞いて。」

「いや、いいんだよ。」

ただ、魔法世界にも居づらくなってね。

それでいろんな世界を回ってたんだ。

そういえば、僕達が前に居た世界にも行ったよ。

もう新しい魔王が現れていてね。なんだか、糸を使う女勇者が活躍していたよ。いやー向こうとこっちじゃ時間軸が違うみたいで、まだ二年しか経っていなかったよ。それとね、アネリアさんという人にも会ったよ。

あの人は神を超えているね。

僕的能力が全て通じなかったし、見稽古でもまるで見取れなかったよ」

「そうか……懐かしいな。」

今の俺ならアネリアさんにどれだけついていけるだろうか？

それにミコも向こうで元気にやっているようだし。

ヤバイ泣きそう。

「何をしてるんですか先生。

あ、お客さんですか、こんばんは。」

「こんばんは。」

「おう、ライナ。なんだもう夜か。」

少しばかり感傷に浸っていたら、思った以上に時間が経っていたようだ。

「そうですよ。もう夕食の時間ですから呼びに来たんですよ。お客さんの分も用意してありますから、良かったら食べていって下さいね。」

「ありがとう、ライナちゃん。もちろん頂くよ。」

「ちゃん……?」

「ライナ、気にするな。  
こいつはこういう奴だ。」

「そうですか、分かりました。気にしません。」

「ひどいな」

「ほら、行くぞ。早く行かないと飯が冷める。」

偽善を急かしながら、移動する。

「ところで、ライナちゃん。」

「はい？」

「君、複写眼保持者だよな。」

「え？　なんで……………」

「君に教えた魔法があるんだ。  
しばらくはここに厄介になるから、その時に教えるよ。」

「しばらくつて、さつさと仲直りしろよ。」

「僕も仲直りしたいんだけどね。  
光の無い目でドス黒い瘴気を放つ安楽ちゃんを見ると……………ね。  
話をした相手はまだ六歳の女の子なのに……………  
計画に必要な事なのに……………  
解って貰えるまで待つしかないんだよ！」

「そこまで切羽詰まってるのかよ。」

「まあ、この土地の事で借りもあるし、落ち着くまでいくらでもいる。な。」

「うん。ありがとう。」

「さあ、飯にするぞ。」

三人で食堂に入ると。

「遅い!!」

腕を組んで仁王立ちしているエヴァが居ました。

「人を呼びに行くのにどれだけかかっているんだ!」

「いや、その……………」

「ねえ……………」

「なんだ?」

「どこでも誰でも、男は女には勝てないんだね。」

「惚れた弱味だろ。」

むしろ真理か？

「父様も……その人、誰？」

「ん、そうか。エヴァは客をロバートだと思ってたんだな。  
こいつは偽善。

友人みたいなもんだ。」

「どうも、エヴァンジェリン・A・K・M・ナナナナミです。」

ちゃんちゃん「なんだよ？」

「僕は今、女性とは会話出来ないんだよ。」

「はあ？」

「なんでか分からないけど、安楽ちゃんは女の勘とかで僕が女性と  
会話したのが判るらしいんだよ。」



「どんな超能力だよ。」

「知らないよ。けど、確実に判るんだよ。」

「でえ、どうするんだよ。」

「通訳して。」

「うわっ、めんどくせえ。」

「とりあえず事情を説明して、無視する訳ではない事を理解してもらって。で、僕のこと君が紹介して。」

エヴァにこいつの名前と、とにかく女性と会話出来ない事、狐面は外せないことも教えた。

エヴァもよく分かっていないようだが納得はしてくれた。

話も終わったし。

ようやく飯にありつける。

全員で手を合わせて

「「「いただきます。」「」「」

この文化は、俺が二人に教えたんだ。

いただきます。と、ごちそうさま。は世界に誇れる文化だと思う。

「「え？」「」

ん、どうかしたのか？

「「お面、外すんですか？」「」

「『これを付けたまま食事する方法なんて知らないしね』  
『外さないと食べれないよ』」

あくまでも、ライナだけを見て答える偽善。

外せないと言ったんだけどなあ。

~~~~おまけ~~~~

「ギゼンさんが……女の人と食事している気がする……私……嫌  
われたのかな……もし……もし……ギゼンさんに……嫌われたら  
……ふふふフフフフ負負負怖怖腐腐斧腐腐……  
こんな世界……もう要らない……全部……ぜんぶ……コワシチ  
ヤオウカナ？」

完全なる世界のメンバー一同は思った。

（ギゼン、何でもいいから戻って来い！！  
世界が危ない！！）

この時、食事をしながら偽善は、背骨の代わりに氷柱をぶちこまれ  
たような感覚を味わったらしい。

## 第八話（後書き）

渡った異世界が何処か分かりますか？

『人類最低』は『欠陥製品』にするか考えたんですが、語呂を良くするために『人類最低』にしました。

## 第九話

あの魔法協会理事はここに学園都市を造りたかったらしい。

業者の人達が入って来て、最初は何事かと思ったが、偽善が説明してくれた。

工事も二年程であれよあれよと言う間に完成させた。

「なんだかな〜魔法協会の拠点を、わざわざ学園になんかしなくていいと思うんだけど。」

そこら辺はどうなんだ？ 終身名誉生徒会長様？」

「『いかにも！』」

『その通りだね』

『日本には古来から呪術協会あるから』

『そことは絶対争うだろうね』

『それなのに』

『一般人も入る可能性の高い物を建てるなんて』

『一体何を考えてるのやら……………』」

この終身名誉生徒会長という肩書は、偽善が要求した条件だ。

まだ、生徒が一人も居ないのに生徒会長を名乗っている。

後、なんのこだわりか……変な猫の着ぐるみを着ている。  
もう慣れてしまったが。

「反対しろよ………」

「『一応』

『名目は見習い魔法使いの育成』

『だからね』

『これなら人にものを教えてても不自然じゃない……かな』  
『それに面白そうだったし』」

「生徒はいつから採る予定なんだ？」

場合によってはこの家の結界を強くしておかないと。

「『生徒はもう二年後だね』

『教員をまだ集めきっていないし』

『ここの設備もまだ完全じゃないみたいだしね。』」

「まだまだ、準備が出来ていないんだな。

……エヴァとライナも通わせてみるか……何年後になるかは  
分からないが。」

「『原作開始時には通ってもらおうよ』

『説得については君に任すけど』」

「また、原作か。

いい加減内容を教えてくれよ。

ネギま、が何かの物語なのかは分かっているが、内容を俺は知らないだよ。

時々現れる転生者は原作の事知ってるんだぞ。

俺も知りたいよ。」

「『だめだよ』

『その方が面白そうだし』」

「そんな理由か……慣れてしまった自分が嫌だな。」

「『よろしい』」

「なんで、上からなんだよ。」

「『なんとなく?』」

「なんで、疑問形なんだよ。」

「『おつと』

『そろそろ安楽ちゃんが僕を許してくれた気がするから帰るね』」

「唐突過ぎるだろ。……………で、ライナとの約束は？」

「『お預けかな？』

『君は伝勇伝を読んでないから教えられないだろうしね』」

「『求めるは雷鳴』《稲光<sup>いじく</sup>！！』」

「『『求めるは侵入』《蝕走<sup>しよく</sup>！！』」

突然、放たれた雷撃を偽善は黒い霧を出して防いだ。

「お帰り、ライナ。」

「『ひどい挨拶の仕方だね』」

「ただいま先生。それと、やっぱりキャンセルされましたか。」



「厄介な相手と厄介な約束しちゃったな。お前も……………」

「『残念だったね』

『時間切れだよ』

『結局僕にその魔法で一撃も与えられなかったね』

『ということだ』

『その眼についての秘密は教えてあげません』

『じゃ』

『僕はもう帰るから』

『エヴァちゃんにもよろしくね』

『バイバイ』

縁が合ったらまた会おうね。」

「おう、またな。」

そして、偽善は最初から居なかったように消えた。

……………着ぐるみのままで。

「偽善さんの移動方法は複写眼でも解析出来ないんですが……………魔力や気は使っていないんでしょうか？」

……………はあ…考えても無駄でしょうね。

寝るとしますか、お休みなさい、先生」

「お休み」

原作か………この世界の大筋はもう決定してるのかな？

あるいは、俺と二人がここで生活しているのも原作通りなんだろう  
か？

いや、俺は100%イレギュラーだろう。

ライナも偽善曰は転生者らしいし。

前世の記憶や神様と会った記憶も無いらしいけど。

「まあ、自分が思うように生きるさ。」

原作の内容なんざ知ったこっちゃない。

自分で考えて、自分で決めるさ。

エヴァもライナも家族だ。

転生者はエヴァを狙う奴が多いからな、家の娘に手を出す奴は潰す。

今はそれでも良いだろ。

しかし、なんだかんだで偽善が一番付き合いの長い友人だしな。

あいつの頼みぐらひは聞いといてやるか。

今から100年以内に起こる魔法世界の戦争の介入。

どこに味方しても敵対しても良いから、とにかく参加する事。

ついでにライナも連れてくる事。

なんで、あいつはライナの事を気に入ったんだろ？

昔、あいつが面白いことがあるって言っていたヨーロッパで拾ったのに。

「まあ、これも考えるだけ無駄だな。

そうだ、確か、今日の飯当番俺だったな。  
早く支度しないと。」

こんな、日常でも良いよな……………

~~~~おまけ？~~~~

「ギゼンさ~~~~ん」

「安樂ちゃ~~~~ん」

ひしっ、と抱き合う二人。

今まで喧嘩をされていて、長い間顔も合っていないとは信じられない程、自然に再会していた。

「ごめんなさい！ ギゼンさん。」

デユナミスさんに言われてやっと気付いたの、あれは計画に絶対必要な事だって。」

「『良いんだよ安樂ちゃん』」

『分かってくれたら』」

『もうそれだけで良いんだよ』」

「ギゼンさん！」

さらに、抱きしめる力を強める安楽。

「『安楽ちゃん』」

それに応えるように抱きしめる偽善。

そんな仲睦まじい二人を見ていた。完全なる世界一同は、

（仲直りしたのはいいんだけど………なんでギゼン？は着ぐるみなんか着てるんだ？）

まだ、偽善は猫の着ぐるみを着ていたようだ。

着ぐるみを着ているのに偽善と分かった安楽は一体？

「ギゼンさんの事で分からない事なんかありません。」

たとえば、変装しようが変身しようが分かるんです。」

……………だそうです。

~~~~~おまけ？~~~~~

「『ありがとう』

『デユナミスちゃん』

『安楽ちゃんを説得してくれて』

『これはお礼だよ』」

王の財宝から日本酒を取り出して渡す偽善。

「気にするな。ああでもしなければ世界が滅んでいた。」

酒を受け取りながらも軽く流すデユナミス。

「『そんなに大変だったの？』」

「我が主と協力して説得を繰り返していたのだが、呪詛のようにお

「前の名前を延々呟いていたりしていたな、一時はこの世界が負の感情で覆い尽くされようとした程だ。あの時はもう駄目かと思ったぞ。」

「『そうなんだ』」

『愛されてるなあ僕って』」

「なぜ、そう解釈できる？」

「お前が子供と会話しただけで世界が滅びかけたんだぞ。」

「『女の子の嫉妬なんて可愛いものだよ』」

『男なら』

『それも受け入れなきゃね』」

「……………アンラに……………」

「『え？』」

「お前がウェスペルタティア王国の女王を口説いていた。と言ったら……………どうなるかな？」

「『そんな事したら』」

『それは……………その……………』

勘弁してください。」

括弧つける余裕もなく土下座しながら言い放つ偽善。

つい、数十秒前に、女の子の嫉妬ぐらい受け入れなきゃね。と言っていたのと同じ人物が疑わしくなる程である。

「冗談だ。そんな事をすれば世界が崩壊するだろうな。正と負のバランスが崩れてな。

それはもう良いとして、偽善よ。

何故、お前はそのような被り物をしているのだ？」

「『なんでって』

『かつこいいでしょ！』

『これって！！』」

猫の着ぐるみを着たままポーピングしている。

それを見ているデユナミスは

「そつだな……………」



突っ込むことを放棄した。

「この酒は良いものだな。  
さっそく、頂くとうしよう。」

そこから、デユナミスは独り酒を楽しんでいた。

## 第九話（後書き）

次から大戦に入ろうと思います。

一希をどの勢力に入れようか考えながらですが、おもしろく書けるよう頑張ります。

## 第十話（前書き）

少し遅れてすいません。

やっと書き上がりました。

## 第十話

「そろそろ時期かな……」

偽善が帰ってから更に50年程経ったある日、俺はふと思った。

あいつの言っていた事。そう、戦争だ。

ちなみに、こつちの世界でも戦争はあったんだが、俺はそれには関わらなかったけどな。

「んゝ……行き先は魔法世界のどこかにランダムで繋がるようにすれば良いかな？」

どこにつくかは運次第という方が楽しいだろ。

「後は、ライナは連れて行くとして……問題はエヴァだな。」

自室で着々と準備をしながら計画を練る。

「俺としてはエヴァには留守番を頼みたいんだが……一人で残し

ていくのもなあ……………サテライト30の分身を置いておけば大丈夫かな？

あれも、俺だしな。」

善は急げと、一番近くにいる俺をこちらに向かわせる。

俺だから到着にはそんなに時間はかか「何の用だ？」

「やはり、速いな。

ま、用事というのは単なる子守りだ。

俺が居ない間、エヴァの相手をしててくれ。」

「その位ならお安いご用だが……………どうかしたのか？」

「うん……………まあ……………口で説明するのも面倒だから、記憶の共有使うぞ。」

「それなら、すぐに理解できるな。」

数秒で共有を終わらせる。

「たしかに面倒事だな。」

「だろ。」

「そんな訳だから、しばらく頼むわ。」

「りょーかい。」

次はライナだな。

「ライナー、魔法世界に行くぞ。」

「は？」

突然の発言にきょとんとするライナ。

「今から、行くから40秒で支度しろよ。言っとくけど、拒否権無しの強制な。」

「え？ え？」

「10秒経過ー、残り30秒ー」

「は！」

慌てて行動を開始するようだが、実はこの後、エヴァにも話をするから時間はあるんだけどな。

バタバタと支度するライナを放っておいて、エヴァの所に行く。

「エヴァ。」

「なんだ？ 父様。」

エヴァの部屋はぬいぐるみで溢れていて、かなりファンシーな趣だ。

……… 武家屋敷に合わないな、しばらくこの家も離れるし、出会った時に造ったログハウスを少しいじって渡しとくか。

この家に俺の分身が居るし、チャチャゼロも居るがそれでも手広だろ。

「実は、しばらく家を離れるんだ。魔法世界に用事があつてな。」

ライナと対応が違い過ぎる？

そんなもん、エヴァの方が上に決まってるだろうが。

「用事？ 一人で行くのか？」

「いや、ライナも連れていく。

一応分身は置いていくつもりだが。」

「そうか、分かった。」

簡単に納得されるところも対応に困るな。

簡単なのは何よりなんだが……あっさりし過ぎてるのもなんというか……

「随分、あっさりと済ますんだな。てっきりもっと駄々をこねると思っていたんだが。」

「父様の突飛な発言も慣れたさ。

それに、父様は心配するだけ無駄だしな。

ライナも父様がいるなら大丈夫だろうし。」



そうかい、信頼されてるねえ。」

「じゃ、エヴァには留守番頼んだぞ。」

俺が居ないからって魔法協会の連中が攻めて来ないとも限らないし。」

「任せておけ。人間ごときに遅れはとらんわ。」

思ったよりもエヴァの説得はあっさりといったな。

さて、ライナは準備が出来てるのかねえ。

俺の場合、持つて行くのはこの剣だけで良いしな。

「ライナ、準備は出来たか？」

「はい。完了しました。」

「……………取り敢えず、ベッドは置いていけ、必要ない。」

背中にくくりつけられているベッドを含めた寝具一式。

一人でどうやって、くくったんだよ。

「しかし、野宿の事を考えると。」

「お前は野宿をどれだけ快適にすごしたいんだよ!」

「え」

不承不承という感じで背中のベッドを器用に下ろす。

「よし、準備は出来たな。  
もう行くぞ。」

「ところで、魔法世界のどこに行くんですか？ 何か予定でも?」

解空で空間に裂け目を生み出しながら答える。

「行き先はランダムだが安心しろ、地図とガイドブックは持っているから。」

ガイドブックの名前は、魔法世界の全て、

なんでここまで詳しいんだ？と思える位の情報量だ。

偽善と安楽の所属している、完全なる世界、のアジトの場所まで載っている。

おまけに魔法で自動更新機能付き。

既に絶版物で持っている奴は極少数だろ。

「そんな無計画で……………」

「よし、繋がった。

さてさて、何処に繋がったのかな？」

本当にランダム。行き先は魔法世界としか定めていないから、何処に行くかは俺にも分からない。

「さあ、行くぞ。」

「はあ……………」

ライナは色々諦めたようで、大人しく裂け目に入って行く。

俺も続けて入り、ライナと並んで進んでいく。  
ようやく見えた出口の先には、

『カアアアアアア』 『ギチギチギチキチキチギチ』 『ギャヤエ  
エエエエエ』 『ハアアアアア』

「何ですかここ？」

「ええ…多分これだな。」

#### 魔獣蠢くケルベラス溪谷

魔力や気は一切使えず、その谷底は魔法使いにとってまさに「死の  
谷」と呼ぶに相応しいでしょう。

古くは処刑にも利用され、その残虐な方法は恐れられていました。  
ここは観光にはおすすり出来ませんね。もし、逝くのであれば遺書  
を残しておきましょう      だってさ。」

「……………」

辺りにいるのは蛇を千倍位巨大化して、凶悪にしたような魔獣達。

「とりま走れ。」

「はい。」

脱兎の如く走り出すライナ。 俺は霊子を固定化して谷を登って行く。

霊力は問題なく使えるようだ。

『ギシャアアアアアア』

魔獣の一匹が大口を開けて俺を喰おうと襲い掛かって来る。

あ、こいつ口の中に口が三つ位ある。

「そおい。」

勝手に入って来たのはこっちなので、斬るのも忍びなく殴ることにした。

『ギューッ』

「意外と弱いな。」

これならライナも余裕で逃げ切るだろ。

魔獣の届かない高さでライナが走っていった方向に向かう。

「居た。」

空中で膝をついてぜえはあ言っている。

「お疲れ。」

魔法や気での強化なし。

純粹な身体能力で走り続けりゃしんどいわな。かすれば即死の魔獣に追われながらじゃなおさらだろうし。

「先生、次からは考えて場所を選んで下さい。かなり切実に願います。」

「善処しよう。」

「次はどうするか……この近くの建物なんて、ケルベラス無限監獄（オコジヨ収容所も併設）しかないしな。賞金首が監獄なんか行ってもなあ。」

「（オコジヨ？）そうですね。自首なんかする気はありませんし。」

ガイドブックをペラペラめくりながら考える。

「お、ここに行こうかな。」

ヘラス帝国・帝都ヘラス。ヘラス帝国は亜人の国らしいから、翼を出しっぱなしにしても大丈夫そうだし。

それに剣闘場なんてのもあって、そこで剣闘士として闘えば金ももらえるみたいだぞ。

ここに剣闘士の登録方法まで書いてある。」

「なんで、ガイドブックにそこまで詳しく？  
見た目の厚さ100ページもありますよね？」

「解らん、なんでか知りたい情報は全部載っているんだ。」

「ちょっと見せて下さい。」

「ほれ。」

「ありがとうございます。」

「……………これはっ!!」

何が書かれているか気になって覗いて見る。

帝国の快適寝具100選！

これであなとも快眠間違いないし。

「なんでやねん…………」

ガイドブックに載るような内容じゃないだろ。絶対に。

それでも、キラキラした目で読んでいるライナ、時折「おお……」や



「うぁ……」等と声を漏らしている。

このままでは、いつまでも読んでいそうだから、ガイドブックを取り上げる。

「あ……………」

めちゃくちゃ名残惜しそうにするライナ。

「はぁ……………まずは帝都に行くぞ。

方角は北東な、俺も行ったことがないから、このガイドブックと地図……………は必要かどうかは微妙だが、これを頼りに向かうぞ。」

「帝都……………寝具……………さぁ先生、早く帝都に向かいましょう!」

気合いを入れるのは良いが、残念ながら金を渡してないからすぐに買い物なんか出来ないぞ。

いつ気付くかな?

.....

帝都ヘラスに到着した。

跳んだ？ 今更だろ。

それに特筆するようなことも無かったしな。

まあ、強いて言えば、メガロメセンブリアの艦隊とガチバトルしたり、500年物の古竜とバトルしたりしたぐらいだな。

な、大したことは無いだろ？

ああ、後ライナは帝都に着いた瞬間「先生少し買い物してきます！」とか言って駆け出そうとしたが、俺の「金は？」の発言ですぐに沈んだ。

「働かざる者食うべからず。

てな訳で、さっさと剣闘士として登録しに行くぞ。

早ければ当日にも試合出来るみたいだし。」

「先生……一文無しって、宿とかはどうするんですか？

帝都まで来て野宿は嫌ですよ。」

金は人生七回遊んで暮らせる位は持つてるぞ、こいつには教えないけどな。

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるって。  
さあ、行<sup>ドゴオオン</sup>なんだ？」

「キヤーー」

「何だ何だ？ 野試合か？」

「オイッ！ 警備呼べっ！」

「……………どうやら野試合が盛り上がり過ぎて周りに被害が出たようですね。」

「だな。 お、あいつらじゃないか？」

闘っているのは、頭に大きな角を生やし、褐色の肌をしたヘラス族の男と、魚？のような顔をした魔族の多分男。

「白き雷！」

「紅き焰！」

建物の上を飛び交いながら、魔法を撃ち合っているが、外れた魔法が建物に当たって被害が出ている。

「周りの迷惑も考えろよな。  
はあ……うるさいし止めとくか。  
行け、ライナ。」

「僕ですか！」

「来たれ深淵の闇、燃え盛る大剣！！  
闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！！  
我を焼け、彼を焼け、そはただ焼き尽くす者！！」

「来たれ雷精、風の精！！  
雷を纏いて吹きすさべ南洋の風！！」

あの魔法はやバイな。

「ライナ、あの馬鹿共に、戒めの矢、か、縛呪。」

「はい。」

「『雷の暴風』！！」

「く、『奈落の業火』！！」

詠唱の分、『雷の暴風』の方が速いな。

関係ないけど。

影を広げて二人を丸々包み込む。

「影の牢獄……なんてな。」

中で二つの魔法が激突し爆発するが、周りへの被害はゼロに抑えた。

「解くぞ、準備はいいな。」

「オツケーです。『魔法の射手・戒めの風矢』」

影を解いて落下していく黒焦げの二人をライナの魔法が捕らえる。

これが、ここらの剣闘士のレベルだろうな。

捕縛された二人は、警備兵に連行されていった。

「貴女方が捕縛して下さったんですね。  
ご協力、感謝します。」

「別に良いぞ、こっちにも被害が出そうだったからただけだ。」

「ははは、そうですか。」

「……………ん？ 貴女はもしかして……………影統べる女王！！！」

「……………逃げるぞ！」

「待て！ こちら、  
高額賞金首を発見。援軍を頼む。」

なんでもこうなった。

## 第十話（後書き）

これから更新ペースが落ちていくかもしれませんが、頑張っ  
て書き続けるので、よろしくお願いします。

## 第十一話（前書き）

遅れましたが投稿です。

更新は遅くなっても、週一位のペースでやっていくので、よろしくお願いします。



## 第十一話

『さあ！観客の皆さん！

お待ちせしました！

今回は新人<sup>ルキ</sup>同士の対決です！

ここで華かな初勝利を飾るのか？ それとも惨めな敗北を晒すのか？  
それは自分次第です！

いきましよう！ 南方！ 出身不明 アルファー！！』

フードで顔を隠したライナが入場する。

ちなみに偽名は、複写眼、アルファ・ステイグマだから、アルファだ。

『北方！ 奴隷剣闘士 ジャーック・ラカーン！』

ライナの対戦相手は盾と片手剣を持った少年だった。

可哀想だが、勝負は見えてるな。

『それでは！ 試合……………開始！！』

シュッ ドガッ！

試合を説明するとこんな感じ。

開始と同時に瞬動で接近し蹴り飛ばす。

少年は反応する事も出来ずにくらい、恐らく気絶しているだろう。

『え……えっと、ラカン選手、気絶しているようなのでカウントに入らせて頂きます！』

一応、ルールを言っておくと、対戦相手の死亡・戦闘不能・ギブアップで勝利。

気絶・ダウン状態となると、カウント20で戦闘不能となる。

『1！  
2！  
3！  
4！  
5！  
6！  
7！  
8！  
9！  
10！  
11！  
12！』

ああーっ！ラカン選手、立ち上がりました！』

ほお、立ち上がるか。

中々どうして根性のあるやつ。

しかし、根性だけではどうしようもないわな。

それから少年は、あっさりと20カウントとられて敗北した。

「ライナの初勝利だが、レベルが低いな。

……………非合法の施設にでも放り込んでみるのもアリかもな。  
確か、魔力や気を封じた状態で竜種や魔獣と闘わせる地下闘技場なんてのもあったな。

危険度は高いけど、その分金良かった筈だ。

あいつは寝具を買いたがってたし、金が儲けられる方が良いだろ。」

ククク、楽しくなりそうだな。

その間、暇そうだからあの少年を鍛えてみるのも面白そうだ。

見たところ、才能も在りそうだし、ライナの一撃をくらって立ち上がった根性も気に入ったし。

ククククク、ああ、本当に楽しくなりそうだ。

あれ？ 俺の周りから人が居なくなってるぞ？ なんだだ？

.....

「ご苦労さん、ライナ。

レベルが低くて勝って当たり前。敗けるはずが無い試合だけど、  
— 応、初勝利おめでとうとだけは言っておいてやるよ。」

「祝いの言葉の筈なのに、全く嬉しくないのは何ででしょう？ 言  
葉って不思議ですね。」

「はははは。祝う気も、褒める気も皆無だからな。  
でだ！ このレベルじゃお前の相手になりそうにないから、少—  
—しだけ、レベルが高い場所に変えるぞ。  
そこは登録とかの面倒事も必要ないし、金も高いから安心しろ。」

「いや、別に僕はこのレベルでも満足ですし、今の稼ぎでも十分で  
す。」

「駄目。行くぞ。」

「嫌だー！

僕は平穏が欲しいんだー！」

「ええい、無駄な抵抗をするな！ 諦めろ！」

ギャンギャン、鳴き喚くライナに手刀を入れて黙らせて、目的の裏闘技場に連れていく。

闘技場では、一番苛酷な条件のものを選んで、ライナを置いてきた。

契約は一年なので、一年間生き延びたら多額の賞金と共に帰って来るだろう。

ま、そこは剣闘を見るといふより、人の死を見るのを主としているようなところだけだな。

俺もおいそれと様子を見に行けないのは残念だ。

ライナはこれで良いとして、あの少年奴隷の相手でもしに行こうかね。

金もあるし、買い取ってから鍛えるか。

楽しみだな、最近はエヴァもライナも鍛えることが無くなってきたし、自分も鍛えるのは難しくなってきたいな。

人を強くする位しか楽しみがなくなってきたんだよ。

出来れば、俺の相手が務まる位には強くなってほしいな。

さてと、少年は何処にいるのかねえ？

所属しているところを探せば、すぐにでも見付かるかねえ？

帝都をぶらつきながら少年を探してみる。

一応、剣闘士が集まりやすい場所を中心に探しているんだが、中々いない。

「やっぱ、酒場には居ないか、帝国は飲酒年齢に制限が無いとはいえ、負けたその日には来ないよな。」

となると、何処にいるんだろ？

「おう、ねえちゃん。

こんなところにひとりでどうしたよ？

どうよ、おれらといっしょにのまねえかい？」

「ひゃひゃひゃ、こんな寂れた酒場にこんな良い女が来るとはな。」

うーん、剣闘場の近くでも探してみるか？

奴隷なら、行動範囲なんて限られているだろうし。

「おいおい、むししないでくれよ。」

「相手にされてないだけじゃないのか？

どうだい、ねえちゃん、俺と遊ばないかい？」

剣闘場に戻ってみるか。

酒場を出ようとすると、突然肩を掴まれた。

「何か用か。」

「さっきから話し掛けてるのに酷いなあ、返事位してよ。」

「そうだ、いっぱいぐらい、つきあわねえか？」

「悪いが、用事が在るんでね。  
そんな暇はない。」

「そう、言わずに……さあ!」

強引に引つ張って連れ込もうとしたのだろうけど、生憎その程度じやびくもしない。

「あ、あれ？」

「はあ……めんど。」

肩を掴んでいる男達のアゴを裏拳でかすらせる。

所謂、ピンポイントブローだな。

意識ははっきりとしているのに、足に力が入らずに崩れ落ちる。

「なんだ!？ たてねえ!」



「どうなってるんだよ!」

後ろでまだなんか言っていたが無視して、少年を探す。

.....

結果としては、闘技場の近くで少年を発見した。

柱の一つに寄りかかって、三角座りでぼーっとしていた。

ううむ、なんて話しかけようか？

ナチュラルに自然に話しかけてみればいいか。

「よっ、少年。」

見事な負けっぷりだったな。」

.....何言っちゃてるんだ俺は————!!

これじゃ、ただの嫌がらせじゃねえかよ。

うわぁ、恥ずかしい、初対面の他人と自分から話しかけるなんてかなり久し振りだったから、変な事口走った！

「あ、いきなりなんだよ。」

少年は不機嫌そうに返してくれた。

返事があっただけ良かったよ。

「いや、さっきの試合を見ててな。  
一度立ち上がったのは凄かったが、結局簡単に負けていた少年が居るなぁ。と、思って話し掛けたただの物好きだよ。」

俺の口はどうしてしまったんだろう？

口走り過ぎて、暴走してるな。

「てめえ！…………ちっ、はぁ…………」

一度立ち上がって拳を振り上げたが、すぐに座り直した。

「何も言わないのか？」

「負けたのは事実だからな。

けどな、次戦う時には俺が勝つ！」

やっぱり、こいつは面白くなりそうだ。

「ふむ、少年。

強くなりたいか？」

「ああ？」

「だから少年。

強くなりたいか？

なりたいのなら、強くしてやるぞ？」

「……強くなれるんなら、強くなりてえよ。」

「分かった。少し待ってろ。」

「は？」

呆然としている少年を置いて、俺は歩き出す。

目的地は少年が所属している剣闘団だ。

一時間程で戻って来たが、少年は座ったままだった。

「よし、行くぞ、少年。」

「え？　おい、ちょっと待てよ！」

慌てて着いてくる少年。

「そういえば、少年よ。」

名前はなんていうんだ？

いい加減、少年はやめたいだろ。」

「今更かよ。」

俺は「ジャック・ラカン」。

最強の剣士になる男だ。」

「そうか、俺は七々己　一希。

こっち流じゃ、カズキ・ナナナミだが、お前は俺をマスター師匠とだけ呼べば良い。」

「へいへい、よろしくお願いします。マスター。」

「ついでに言つとくと、俺は世界最強か、二番目だから最強の剣士に成りたきゃ、最低でも俺を超えなきゃな。」

「はっ、すぐに超えてやるよ。  
で、何処に行くんだ？」

「ん、とりま、近くの荒野だな。  
所で、お前の武器はそれだけか？」

片手剣を指差しながら聞く。

「そうだけど？」

「そうか……………流石に厳しいかな？　まあ、大丈夫か、様子を  
見ながらにするか。うゝむ。」

よし、ジャック、これ持つてろ。」

核金を投げ渡す。

「なんだこれ？」

「武器が無くなってどうしようもないときは、**武装錬金**、って言えば武器になるから。どんな武器になるかは、お前次第だけだな。」

「へえ」

「んじゃ、始めるぞ。」

魔兵召喚。取り敢えず100体。」

この魔法は召喚と言っているが、闇の魔素を影で編んで造っている影の兵隊だ。

ある程度、自動で戦闘するようにしているので、中々便利だ。

「じゃ、頑張れ。」

「いやいや、この数はおかしいだろ。」

「大丈夫だよ。殺さないように設定しているから、最悪九割九分九里殺しにしかないって。」

「それ、0.1%しか生きてない――！」

## 第十二話（前書き）

段々とネタが思い付かなくなってきた作者です。

ああ、原作が遠い。

文才が欲しいと切に願います。

## 第十二話

「霸王！！ 炎…熱…轟竜咆哮爆烈閃光魔神斬空羅漢劍！！」

ドパアアアン

「技名が長すぎる。決めポーズと合っていないぞ。」

いきなり、失礼。

今、少しラカンの必殺技を考えてる所だ。

「ダメか。」

「もっと、シンプルに行けよ。」

「シンプルに……ルアワカアアアンヌツ・ブウウレイドオ！！」

ドパアアアアン

「舌巻き過ぎだろ。何言ってるのか分かんねえぞ。」



「でも師匠よお、明日が締め切りだぜ。  
やっぱ、俺は素手のが強いし決勝も素手でいこうや。」

「それでも良いわ良いんだが……うーん、ちょっと全力撃ってみるや。」

「よっしゃ、行くぞ。くそ師匠！  
全力全開・ラカン…インツ…パクトオ…！」

ラカンから放たれる強大な気弾。  
それを俺は何をするわけでもなく受ける。

ドオオオン！

「どうだ、くそ師匠、くたばったか。」

「うゝむ、確かに強い。しかし、強すぎるんだよなあ。  
これ喰らったら、大抵の奴は死ぬよな。  
ルール上では、対戦相手の死亡は問題無くともやっぱりなあ……  
……」

俺は無傷ですよ。

服が少し破けたがこの程度なら問題ない。

「くそつ、生きてやがんのか。」

「それに、最初に最強の剣士とか言ってたし、剣技も造つといった方が良いかなあと思ってな。」

あ、それと、くそつて言つた分覚えとけよ。」

「ぐ、確かに。」

剣を使う以上は、剣での必殺技も必要だ。」

こいつ、馬鹿だわ。

「けど、確かにお前の言う通り。」

決勝は明日だ。考えている時間ももうない。

それに、この大会を優勝すれば奴隷解放に大きく近付く。無茶をする場面じゃないわな。

うん、この話しは忘れて、明日に備えてさっさと寝よう。」

「ぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」

ラカンを置いて帰る。

さてさて、あの馬鹿はどうするかね。

あ、そういえば、ライナはどうなったかな？

この前の闘技場であまりにも受けが良くて、勝手に契約延長手続きをしちまったからなあ、1000万Dp<sup>トランク</sup>稼ぐまで帰ってこれないんだよな。

まあ、あいつだし、のらりくらりでなんとか生き残ってるだろ。

帰ってこれたらラカンと闘わせるのも良いかもな。

‘この試合に勝てば解放される’って試合にライナと闘わせるとか……。

初めて負けた相手と解放を賭けての試合。

死ぬ気で闘うだろうなあ。

面白そうだし、考えとこ。

……

そして翌日。

「ふぁ……」

ベッドからのそのそと這い出る。

うう、この時期（冬）は布団を出るのが億劫になるな。  
寒くはないんだが、何でか布団が恋しくなるんだよな。

うん、俺でも抗いがたい程の恐ろしい魔力を秘めている。

ま、それはそれとして、だ。

「あの馬鹿はどうなったかな？」

顔を冷たい水で洗い。

頭を覚醒させてから、修行場に向かう。

「ぬおおお!!」

まだやってるよ。

「駄目だ駄目だ！　こんなんじやてんで駄目だ！　どうする！？  
だがっ！　燃えてきたぜっ！！」

目の下に隈をこさえて黒板の前で燃えている馬鹿。

これはあれだな。徹夜したら明け方に妙なハイテンションなるあれだ。

「待てよ………斬撃にこだわりすぎたのがマズかったか……！？」

ダメだこいつ、はやくなんとかしないと。

「止めんか馬鹿が。」

「なんだ、師匠か。」

少し待ってくれ。もう少しで何かが掴めそうなんだ。」

はあ、こいつはホントに。

「だから、止めんか馬鹿が。」

今度は拳と共に言葉を放つ。

「たわらばっ。」

頭を抑えるが、とにかく止まったな。

「何すんだよ、師匠！」

「お前は試合当日の朝に気を使い果たす気か？  
まさか、徹夜するなんて思わなかったぞ。」

悪ふざけで乗せたのは俺だが、ここまで悪乗りが過ぎるとは流石に  
予想外だ。

「でもよお……」

「でももへったくれもあるか！　とにかく休め！　試合は昼からだ  
から少しでも回復させろ。」

「へーい……」

「新しい技はぶっつけ本番で試せ。」

主人公気質を持つてたら絶対に使える技を思い付くから。」

「なんだ？ 主人公気質？」

「こっちの話だ。気にするな。」

この馬鹿がそれを持つてるか知らんがな。

「へいへい、それじゃ休んどきますよだ。」

ぶつぶつ文句を言いながらも休みに行く馬鹿。

「さつてと、俺は軽く食べる物でも作るとするかね。」

あ、あの馬鹿用に体力回復する食べ物も作ろうかな。

体力回復を最優先にして、味は二の次みたいなので良いよな。

いやあ、俺って優しいなあ。

ちなみに出来上がった物を馬鹿に喰わしたら、「がっふあー!!」と

か言っ て白眼を剥いていたが、口に残りを詰め込んで呑み込ませたので、ちゃんと体力も回復出来た。

うん、本当に俺って優しいなあ。

.....

そんでそんで、試合開始の時間となり、あの馬鹿と対戦相手である虎の獣人がコロシアムで向かい合っている。

『それでは、ヘラス冬季大会・ 杯!!』

決勝！北方は僅かな期間ながら！破竹の勢いでここまで登り詰めた男！

奴隷剣闘士・ジャック・ラカーンツ!!』

「「「「わぁー！！！！」」」」

『対する南方！ その実力は折紙付き。 新人剣闘士達に立ちはかかる巨大な壁！ ベテラン自由剣闘士！ ニヤンドマの狼獣人・ウルフ王っ!!』

「「「「「うおおー！！！！」」」」」



相手、‘ニャン’、ドマなのに、‘狼’、獣人なんだ。

それに、あの馬鹿より声援が大きいな。そこは流石ベテランと言ったところか。

『さあさあ、ルールは皆様ご存知のとおり!!』

ギブアップ・戦闘不能・死亡で決着!!

武器・魔法に使用制限なし!!』

『両者位置について………開始!!』

開始と同時に狼獣人は瞬動で接近。

それを馬鹿は回転しながらジャンプでかわし、空中で剣に気を集中させていく。

あの馬鹿……気を集中させすぎだ………

『オラアッ』

馬鹿が投げた剣が地面に触れた瞬間。  
音が死んだ。

と思ったら、

ドゴオオオオン

「うわあ!？」「キヤアア」「うおおっ」

阿鼻叫喚。その言葉がよく似合う状況になった。

やり過ぎだな。

極音速の投剣と凝縮された気の炸裂……技とも言い難い力業だな。

『す、凄まじい一撃！ てゆーか、ウルフ選手は生きてるのか！？  
原型を留めているのか！？』

かろうじて生きてるだろうな。

『ああー、ウルフ選手、生きていますようですが、戦闘は無理のよう  
です。』

ということ、勝利っ！！  
ラカン選手！』

ま、当然なんだが、あれは剣技と呼べるものなのか？

『早速勝利者インタビューを行ってみましょう！！』

先に帰るとするかね。

しかし、あいつのあれは主人公気質というよりはただのバグだな。

剣に気を込めて投げるだけであんな威力になるか普通。

特に術式も刻んでない、何処にでもある平々凡々な剣だぞ。

はあ、まあ、あの馬鹿は細かい所は全部気合いで済ます馬鹿だからな。

それが今までの弟子とは毛色が違い過ぎるんだ。

はあ、脳筋を鍛えるのは大変だな。

いつそ、アネリアさんにやらされたメニューをさせるか？

あの脳筋馬鹿ならなんとかやり遂げるだろ。

## 第十二話（後書き）

決めポーズや名前は技の威力向上に関係するから大人がやるんですよ？

決して、ラカンだけがやることじゃないですよ？

ちなみに、ラカンの対戦相手のウルフ王は原作に名前だけ登場した、ウルフ王子の父親という、特に活かされない設定です。

## 第十三話

「さて、馬鹿弟子よ。来月の大会に優勝すればお前の解放金は十分にたまるだろう。」

これで、晴れて、解放奴隷だ。良かったな、自由になれて。」

「あ、ああ……………」

「そこで、言つてあつた通り、今から卒業試験をするぞ。」

「……………ああ。」

なんだその、この世の終わりみたいな顔は。

「ルールは簡単。全力で俺を倒しに來い。」

俺はそれを全力……………本気で叩き潰すから。」

全力は流石に不味いわな。

「ここまで来たらやるしか無いのか……………」

覚悟を決めた顔をする馬鹿。

そういえば、この馬鹿に修行をつけ始めてからもう八年になるんだな。

今では俺を越す身長になり、おまけに筋肉達磨になんかなくなってしまつて。

まあ、今回はあくまで卒業試験だ。

こいつの好きなド突き合いでもしてやるかな。

「それじゃあ、始めるぞ。

合図はこのコインが地面に落ちたらだ。」

ピンッ、と指でコインを弾く。

ゆっくりとコインが落ちてゆき、地面につくと同時にお互い接近し殴り合う。

馬鹿、いや、ラカンは気で強化し、俺は素の身体能力だが、構わず、全力で殴り続ける。

片方の頭が弾かれれば、お返しとばかりにもう片方の頭が弾かれる。

ゴツ、ガツ、と硬質な音を出しながら殴り合う俺達。

技術も何もない、真っ向からの殴り合い。

「くっくくく……………」

真っ向からか、素の身体能力とはいえ、真っ向から俺と殴り合う事が出来るのか。

「はは、ははははははー！」

面白い。本当に面白く育つたものだ。

「どうした、こんなもんじゃないだろ！」

「ぐ、ぬおおおおおおー！」

……………

「はあ……………はあ……………楽しかったぞ。」

文句なしの合格だな。」

「ハア、ハア、ハア、ここまで、ボコボコに、されて、合格、なんて、言われても、嬉しく、ないぞ。」

大の字で寝転んでいるラカン、息も絶え絶えながらも悪態を吐けるなら、大丈夫だな。

「くくく……それじゃ、俺は行くとするか。  
次に会うときにどうなってるか楽しみにしてるよ。」

「次は、必ず、ぶっ飛ばしてやる！この、くそ師匠！」

「それもそれで楽しみにしておいてやるよ。」

寝転んだままのラカンを置いて、歩き出す。

さて、どうするかね？

戦争は帝国についてやるけど、それまではどうするか、世界を放浪するのも良いかな。



メガロメセンブリアには正義馬鹿が多いから、面倒だし。

うーん、学術都市であるアリアドネーで俺の能力について研究するのも良いな。

あそこは、学ぼうとする意志と意欲を持つ者なら、例え死神だろうが悪魔だろうが受け入れる。という所だからな。

でも、世界を放浪とかはしなさそうだな。

うーむ、どうするか……………

ま、今はいいか、とりあえず帝都で買い物でもしよ。

流石に、着流しを着て行ったら、場違いだろうし……………今でも少し、浮いてるしな。

でも、服はなあ、ファッションなんて気にした事ないし、店員におすすめの聞いてそれにすれば平気だろ。

服と食糧……………後、要るものなんて在ったかなあ？

適当にこれからの事を考えながら、帝都の服飾店を探し歩いた。

ガイドブックを見ても良いんだが、店を探すのも買い物 of 醍醐味の

一つだと、俺は考えている。

時間がある時限定だが。

しばらく探していると、面白そうな店を見付けた。

少し、入り組んだ路地の中にあり、薄汚れた印象を受けるが、中からは強力な魔力を感じる。

隠れた名店のような雰囲気を漂わせるその店に、とてつもない興味が沸いた。

「ここにするか……いや、むしろ、ここしかないな!!」

店の前で、大声を出して何してるんだろ……俺。

気を取り直して、入るか。

ガチャ

「お帰りなさいませ、ご主人様」パタン

俺の目はどうかしたのかな？

エプロンドレス、所謂メイド服を着ている人が見えたような気がするんだが？

ここは服飾店で間違いないよな？ 秋 原で有名な某喫茶店では無

いよな？

ふゝ……落ち着け。

きつと気のせいだ。

もう一度、よく見ればなんてことはない変わった服の店員さんがいるだけだ、決して、メイドや侍女なんか居やしなかった筈だ。

よしっ。

ガチャ

「お帰りなさいませ、ご主人様」バタン

………増えてた――！！

え？　なんで？　なんで？　二億年以上生きててこんな事は始めて  
なんだけど。

いやいや、落ち着け、深呼吸だ、深呼吸。

たかが服屋に入っただけと思ったら、いきなりメイド服を着た女の子に  
深々と頭を下げられて、お帰りなさいませ、ご主人様と言われただ

けで、珍しく無いことの筈なんだ！

いや、本当に落ち着け、珍しく無いことの筈が無いだろ。

訳が解らなくなって、思考が支離滅裂になってしまっているんだ。

一から、順番に考えていけば大丈夫だ。

えーと、まずは何処から思い出せば良いんだ？

これからどうするか考える。

買い物をする事に決める。

良い店がないか物色する。

面白い店を発見する。

店に入る。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

パタン

???

もう一度、入る。

「「お帰りなさいませ、ご主人様」」

増えてるー！ 今ここ

うん、順番に思い出しても意味不明だ。

……でも、入るしか無いよな。

ガチャ「「お帰りなさいませ、ご主（ボタン！）」

「  
「  
「

また増えてた……

ここまで来たら、どこまで増えるか見てみたいとも思えるな。

ガチャ

「いい加減にしろや、」ごらあああ！――」

「うぐうあ……」

キレの鋭いハイキックが綺麗に俺の側頭部に決まった。

「まさか……俺が……反応も出来ない……とはな……」

世界の広さを痛感した瞬間だった。

いや、それよりも、俺の行く世界では理不尽な強さの女性は必ず要るものなのか？

「というわけで、言い訳位は聞いてあげますよ？」

「そのう、気が動転したというか、メイド服を着た人が二人や三人突然増えて、びっくりしたというか……」

今、俺は「ごらあ！」と言いながらハイキックを決めたメイドに尋問されている。

「それで、何度も開けては閉め、開けては閉めを繰り返したんですか？ いっそ、私がお客様を締めて差し上げましょうか？」

怖い。

ただそれだけです。

「あの、たくさん買い物するんで、許してもらえませか？」

「姉さん、こつ言ってるんだし許してあげたら？」

「けどねえ……」

「そうだよ、せっかくの力も……じゃなかった、金づる……でもなかった、お客様なんだから。」

ん、変な鳥の名前が入ったような？

「分かったわ、あ……じゃなくて、お客様、どの様なものをお探しですか？。」

「えっと、スーツと普段着を何着か、上から下まで一式を揃えたいんだけど。なにかオススメとかあるかな？」

「そうですね、分かりました。ショウ、ソウ、案内してあげて。」

「了解」

二人に案内されて、服の展示されている所に行く。

ちなみに三人は恐らく三つ子で、全員同じ顔で同じ服（メイド服）だ。見分けが全くつかない。

「まずはスーツからですね。そういえば、お客様のサイズは？」

「サイズが、よく考えれば測ったこと無いな。」

スーツとなると、ちゃんと採寸しとかないとだな。

「採寸とかは出来るのか？」

「出来ますよ。するならこっちの部屋です。」

「頼むわ。」

採寸する部屋に入ると、店員の一人はメジャーを取りに奥に行ってしまった。

「今の内に服を脱いでおいて。」



「え、服脱ぐの？」

「当然。女同士なんだから恥ずかしがることもないでしょ。」

「……………俺は男だ。」

「え？」

なんか懐かしいな、この反応。

最近は間違えられることも減ってきたのに。

そのまま、メジャーを取りに行った子が帰ってくるまでの数十秒間。俺は話さず、相手も固まったまま過ぎていった。

「すみません、探すのに手間取っちゃって、て、どついう状況ですか、これ？」

メジャー片手に戻ってきた子の疑問も至極当然だろう。

「えーと、シヨウ、どうしたの？ 大丈夫？」

「ソウ姉、ちょっと。この人男だって。」

「え？ 本当？」

「うん。嘘は言っていないみたいだし。」

「うーん、シヨウが言っんなら確かだろうけど……採寸はどうする？」

「流石に男の人は無理。」

「だよねえ。」

「コト姉呼ぶ？」

「姉さんなら大丈夫だろうけど……今は書類仕事してるんじゃないかな？ たけ？」

「あー待て待て。それなら手はあるから。」

影で、真っ黒な俺の分身を作り出しながら言う。

「これは俺と全く同サイズの影分身だから、これを測れば良いだろ。」

「お。」

「便利。」

「「では!」「」

そそくさと影分身を採寸する二人。

「うわ、腕細っ!」

「腰も………負けた……」

影分身が良いように弄られ、助けを求めるような目でこちらを見ているような気がしたが、無視した。  
てゆうか、影分身に目はないし。

「採寸終わりました。」

それじゃ、スーツからで良いですね。」

「そうしてくれ。」

こうして、俺はスーツ（黒）を上下二着、（白）を一着。  
普段着用に、ジーパンとシャツ、上着等々を複数購入した。

ここの服は魔力がうつすらと込められており、見た目よりも頑丈に  
出来ていて、中々の防御力を誇っている。

「アリアドネーに行く前の準備はこれぐらいで良いかな。  
忘れ物も特に無いだろ。」

.....

「先生ー！ 僕の事、忘れてないですよねー！」

「グウオオオオオオオー！」

「っあ、『闇の吹雪』」

『またまた、勝利しましたR。早速次の魔獣逝きましょう。』

「ノオオオオオオオオオオ」

.....

無い……………よな。

うーん、改めて考えると何かを忘れているような……………

何だったかな？ 思い出せないって事は対して重要な事じゃ無いって事だよな。

……………

「だから、僕の事ですょー！」

「どこに向かって叫んでやがる！ てめえの相手は俺様だろうがっ！！」

『猛然と襲い掛かるK。それに対してどうするR？  
っーか、どっちでも良いからさっさと殺せよ。』

「ちょ、なんで実況がそんな投げ槍に！？」

『うるせえ！ てめえらは魔獣相手でも無傷で勝つちまう馬鹿ども何だよ。』

内の闘技場の為にどっちでも良いからさっさと殺られる。』

「そんな殺生な。先生ー！ 早く迎えに来てくださいー！」

「死ねや餓鬼があー！！」

「ああ、もう、雷の暴風、」

『おっと、大呪文である‘雷の暴風’が決まった。

これは真に残念ながら、Rの勝利。

そして、今日のRの試合はこれまでです。

敗れて黒焦げになったKには素敵なその後が待っているので安心して下さい。』

「もう、嫌。

報酬もそろそろ貯まった筈なのに。先生ー！ 僕の事覚えてますよねー！」

.....

「本当に何だっただけなあ？

頭の片隅に何か引っ掛かるんだよなあ。」

### 第十三話（後書き）

三つ子メイドを出したかっただけです。  
後悔も反省もしていません。

三つ子メイドの名前の由来は日本の古典楽器からとっています。

琴、箏、諍。

次回からは場をアリアドネーに移します。

主人公の影魔法と、神様印の能力を合成させて新しいものを作り出す。予定。

## 第閑話（前書き）

クリスマス番外編です。

時系列等はおかしいですが、番外編と云うことで許して下さい。



## 第閑話

突然だが、今日はクリスマスの前日。つまり、クリスマス・イヴだ。

といつても、おれはキリスト教でもないし、イエス・キリストなんかよりも、遙か昔から生きているような存在だ。

そんな行事など、関係ないし、有って無いようなものだ。

それは、不老であるライナも、真祖の吸血鬼であるエヴァも同じだと思っていた。

そもそも、クリスマスの風習等、ほんの最近知ったばかりで、ヨーロッパ出身の二人も、聖誕祭としての印象の方が強い筈だ。

なのに……………

「なあなあ、父様。

明日は雪が降るかな？

靴下も用意したんだがこれで良いよな？」

目をキラキラと輝かして、片方の巨大な（それこそエヴァがすっぽり入るような）靴下を持ちながら外を眺める、齢600のこの幼女

はどういつつもりだ？

「なあ、エヴァさんや、その大きめの靴下はどうしたんだ？  
そんなものはこの家に無かった気がするんだが。」

「ん？　これか、これは私の手作りだ。」

「サンタさんは靴下にプレゼントを入れてくれるらしいんだ。」

「サンタさんの存在を信じていらっしゃるようです。」

「いや、居るよ。信じてる子のもとにはきっと来るよ。安心してね。」

「そうか、そうか。」

「しかし、どうするか……近頃のエヴァはなんとなくそわそわしているような気がしたが、どうやらクリスマスが原因だったみたいだな。」

「で、どんなプレゼントをサンタさんに頼んだんだ？」

「これが分らないと、俺もプレゼントを用意出来ない。今の時刻はPM5時だから、急げば買いに行けるだろう。」

「娘が楽しみにしてるんだから、出来れば叶えてやりたい。例えば、年齢600の吸血鬼でも。」

「ふふふ……それはだなあ………秘密だ。」

指で口許隠しながら言うエヴァ。可愛いが、それじゃあプレゼントを用意出来ないんだけど。

「あ、そうだ、そろそろ予約しておいたケーキを買いに行かないと。」

パタパタと出掛ける支度を始めるエヴァ。

「むう……………」

プレゼントをどうするか……………ライナに最近エヴァが何を欲しがってる聞いてみるか。

嗚呼、こんな事ならば、もっと親子の会話をしておくんだった。

「エヴァの欲しいモノですか？」

「そうそう、ついでにお前も欲しいモノが在ったら言っておけよ。」

「僕はもう子供じゃないから良いですよ。」

「俺にとっちゃいつまで経ってもお前らは子供だよ。」

「はぁ……まだまだ子供扱いですか……それより、エヴァの欲しいモノですか……確かこの前、町に出た時にあった店の服を欲しがっていたような。」

珍しい店と服だからよく覚えてますよ。」

「おお、それは何処だ？」

「えっと………」

簡単に店の名前と服の特徴を聞いてメモをとっておいた。

「ふう……で、お前の欲しいモノはなんだ？」

「欲しいモノは………平穩？」

「却下」

「ふう……ふう……だろつと思いましたよ………」

チャチャゼロにも一応聞いとくかな。

役に立つかは別にして。

「オウ、旦那ガ来ルトハ珍シイジャネエカ。  
俺ニナンカヨウカ？」

「ああ、最高級ワインをボトルで一本出すから、最近エヴァが欲しがってるモノを教えてください。」

「ケケケ、気前が良イナ。ソングライナラ教エテヤルヨ。但シ、ワインハ忘レルンジャネエゾ。」

「分かってるよ。で、」

「アア、御主人ノ欲シイモノダッタナ。

御主人ハ最近発売サレタウサギノヌイグルミヲ欲ガツテタゼ。  
結構、高イモノデ御主人モアキラメテタヨ。」

「ウサギのヌイグルミね。」

服かヌイグルミか……どっちも買えば良いか。

買うモノも決まったから町に繰り出す。

服屋も目星は付いてるし、ヌイグルミも百貨店にでも行けば売っているだろ。

百貨店でお目当てのヌイグルミを見付けた時、あの靴下のサイズに納得がいった。

「デカイな。」

高さが130センチもある巨大なウサギのヌイグルミ。  
全体的に白いモコモコだが、アクセントとしてなのか、片目を包帯で隠している。

「値段は……三万五千……確かにそこそこの値だが……このサイズじゃな。あ、ついでにこれも……」

別に値段が幾らでも買うことに変わりはないので、さっさと買って人目の無い場所で影にしまう。

次は服だな。

ぱぱっと買って早く帰るか、エヴァが戻ってたら、面倒だ。

服屋もすぐに見つけ、すぐに服を買って、影にしまって終わらせた。

よし、帰るか。

「ただいま」

「お帰りなさい、先生。  
ありましたか？」

「うん、あったあった。エヴァは？」

「まだ、戻ってきてませんよ。  
ケーキ店は遠いですし、歩きだした後、15分は掛かるんじゃないですか？」

「そうか……………そうじゃ、どうするか……………ライナ、チェスでもするか？」

「先生とチェスをしてても勝負になりませんよ。」

「良いだろ、所詮暇潰しだ。」

「はいはい。」

それからエヴァが帰って来るまで、チェスを続ける。

結果は何回も対戦しているから解りきってるが、それでも暇潰しにはなる。

「ただいま!」

決着が着いたちょうどタイミングで玄関から声が聞こえた。

「帰ってきたか……お帰り、エヴァ。」

チェスの結果は引き分け。

ライナの言った通り、勝ちも負けもなく、勝負にはならなかったな。

「父様!ライナ!外だ!外を görmろ!」

「ん……ほう……」

「へえ……」



窓から見た外では、ハラハラと雪が舞っていた。

「これで明日はホワイトクリスマスだな！  
早く靴下を準備しないと。」

ケーキを冷蔵庫に入れてから、自室に駆け込んで行くエヴァ。

俺とライナはそれを見送る事しか出来なかった。

「なんて言うか……チビっ子の元気って凄まじいな。」

「ですね。」

そして、夜も更け、エヴァが寝静まったのしつかりと確認してから、完璧に気配遮断をし、エヴァの部屋に忍び込む。

物音一つ起てずに近付き、影に入れておいた服とヌイグルミを靴下に入れる。

ちらっと、エヴァの様子を伺うが、ぐっすりと眠っているようだ。

バレないように夕食に仕込んでおいた睡眠薬がよく効いてるようだ。

チャチャゼロの前にも、俺謹製のナイフを置いてと。

ゆっくり、入ってきた時と同じように、物音一つ起てずに部屋を出る。

部屋を出て、扉を閉めてから一息吐く。

「ふう……ミッション完了だな。」

これを毎年か……世のお父さん、お母さんは偉大だな。

「次はライナだな。」

ヌイグルミのついでに枕と目覚まし時計を買っておいたから、目覚まし時計の時間を朝七時にセットして、と。

よし、行くかな。」

翌朝。

早朝から起こされた為、どこか目が虚ろなライナ。

靴下に入れておいたゴスロリの服を着て、自分と同じ位のヌイグルミを抱えたエヴァ。

新しいナイフを振り回して俺に斬りかかってくるチャチャゼロ。の  
三人を見ることが出来た。

そして何より、俺の枕元にもプレゼントが置かれていた。

プレゼントは二通の手紙。

送り主は……………言わぬが花だろう。

その日のクリスマスは家族揃って楽しく過ごした。

## 第閑話（後書き）

エヴァのキャラだと、クリスマスとか楽しみにしてそうですね。

ヌイグルミを抱えたエヴァは普通に想像出来てしまい、こっぴどくした。

## 第十四話

ハロー、一希だ。

今はクリスマスとは何の関係もなく、本編に戻ったから、前話について忘れてくれ。

ん？ 俺は突然何を思ってるんだ？

それらはこの際置いておいて、話を戻そう。

只今俺は、アリアドネーの総長と交渉している真っ最中だ。

「では、貴方には影魔法の講師をしながら研究をしていく。という事で良いですね？」

「それで十分です。後、こいつは助手ですんで、よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします。」

イヤー、危なかったなあ、帝都を出る直前にライナの事をやっと思い出して、あの闘技場から引き取ったんだよ。  
1000万Dpという大金を抱えてな。

まあ、こいつも最初はとてつもなく機嫌が悪かったけど、帝都の寝具を買い漁ってたら直ぐに機嫌を直したからな。

全く、馬鹿……御しやすい奴だ。

「住居は、教員用の寮がありますから、そこを使ってくださいね。授業に関しては、他の先生との兼ね合いがありますから、少し時間が掛かりますが、研究は空いている研究室を使つてすぐに始めてもらつても構いません。ただ、危険な実験等をする時は、事前に連絡をいれておいて下さいね、それと」

その後、延々とここでの生活の注意事項を聞かされた。

話が終わると、アリアドネー内の地図や、授業や寮についての資料を渡された。

何故、資料を渡すのにあんな細々とした注意事項を全部言っていたんだ？

老人によくある、やたらと会話をしたがるあれか？

余談だが、アリアドネーの総長はもう結構な歳で、近々引退するんじゃないかと言われているらしい。

入ってきたばかりの俺の耳にも入ってくるぐらいだし、実際に総

長を見ると、その噂も嘘とは言えないだろうな。

「  
以上ですが、何か質問はありますか？」

「いや、特には無いですね。」

「僕もありません。」

「そうですか、それならナナナミ先生。  
改めて、これからよろしく願いしますね。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。」

差し出された手を握りながら、こっちも笑顔で答える。

総長室を出ると。

「あんたらが新しい先生かい？」

中学生位の男の子が突然話し掛けてきた。

今さっき、講師になったばかりなのに、この学校は噂が回るのが早

いな。

「どうなんだ。総長室から出てきたということはそうなんだろ。」

少し考えていたら、無視する形になってしまったようだ。

とりあえず、返事はしといた方が良さだろう。常識的にも。

「ああ、そうだよ。」

俺は、ここで研究員兼講師をすることになった七々己先生だよ。

で、君は生徒の様だけどだけど、何か用かな？

生憎と授業もしていないから、いきなり話し掛けられて質問されるようなことはないはずだけど。」

「違ーよ！おれはこの研究員だ！

見た目はこんなだけでも、生徒なんて年齢じゃねえんだよ！」

「おっと、これは失礼。つまりは先輩でしたか。」

「そういつこった。おれは総長にお前の案内を頼まれたんだよ。」

「それはそれは、よろしく願いしますよ。先輩。」



「解ったなら良い。なら、着いてこい。」

寮と空いている研究室迄は案内してやる。後、アリアドネー内での資料に書かれていない暗黙の了解についてもな。」

「あいあい、委細承知ですよ。先輩。」

あ、なんとなくライナやラカンが俺の事を「師匠」やら「先生」って言い続けるのが分かった気がする。

こつなったら、言い方を変えるに変えられない。別に分かったからどうということもないけど。

「ところで先輩は何の研究をしてるんですか？」

敬語は苦手だな。

会話がないと辛いかと思って話し掛けたけど、何年も敬語を使ってなかったから違和感ありまくりだ。

「あ？ 突然、なんだよ。」

「ちょっと気になりましたね。先輩はどんな研究してるのかなつと。」

話題の振り方は変だったかもしれないけど、内容としては普通だろ。

「……言っても問題は無いか……」

まあ良いだろ、教えてやる。おれの専門は雷系だ。

その新たな使い方について研究している。

具体的には、傷口付近の細胞に電気刺激を与え、新陳代謝や細胞分裂を活発にさせ、傷を回復させるんじゃないかと再生させる……とかだな。」

「……それは凄い事ですけど、寿命が縮むんじゃないんですか？」

確か、人間の細胞分裂の回数には制限というか限界があった筈だ。

それを電気刺激で強制的に活発にするという事は……

「死ぬよりはマシだろ。」

「さいですか。」

なんともシンプルな考え方のような。

.....

「ここが研究室だ。

前に使ってた奴の痕が残ってるが、研究に影響が出るようなら自分で何とかしろ。

置いてある備品は最低限の物だが、自由に使って構わないから。」

「後って言うか.....」

壁四面に描かれた意味の分からない言葉の羅列。

十字架や松明？ 巨大な眼球、人間のようなモノの絵。

床や天井にも、色彩鮮やかな曼陀羅や幾何学的な魔法陣が、所狭しと刻み込まれている。

「前、ここを使ってた奴は何を研究していたんだ？」

それにどうやって色を刻み込んだんだ？

足の感覚からして、特に凸凹はしていないが.....

「この前任者はな、宗教と魔法との結び付きについて研究していたんだよ。」

「それが何で、こんな部屋に？」

「流石にそこまでは知らんが、奴は神を体現させるとか言ってたな。最終的には狂信者みたいになって、生徒を生け贄にしようとしたのが発覚して、アリアドネーを永久追放されたがな。全く、教職者が狂信者になるなんて、だじやれとしても笑えねえ。」

「フッ……」

「鼻で笑うな。鼻で。おれも面白いとは思ってねえよ。」

「結局、この部屋は良く分からない宗教信仰心が燃え上がった燃えカスと云うことか。結構、上手くね。」

「フッ……」

「鼻で笑われた！」

「それより、ここの研究今からお前の物だ。学園に迷惑をかけない範囲なら自由しろ。次は寮だ。行くぞ。」

「はいはい、了解しました、先輩。」

.....

「お前の部屋はここだ、キーも中にある。  
ある程度の家具は揃ってるが、必要な物があるなら自費で揃えろ。  
まあ、独り暮らしする分には大丈夫だとは思うが。」

「はいはい、了解。」

.....あれ？ 独り暮らし？ そっいえば、ライナは？」

「ライナ？ 総長室の前で一緒にいたガキか？」

ガキか、多分先輩よりも歳は上だと思うけど。

「多分それです。」

「そいつなら.....研究室にも居なかったぞ。  
むしろ、最初から着いてきてなかったぞ。」

「.....はあ、別に良いか。  
ほっといても、何とかするだろ。」

「良いのかそれで？」

「大丈夫ですよ。生命力と順応力は図々しい位高いですんで、放任主義とでも思ってた下さい。」

「じゃあ、おれは自分の研究室に戻るから、後はお前でなんとかしやがれ。」

「はい、先輩も研究頑張ってくださいね。」

手を降りながら帰っていく先輩。

白衣を身に纏っていても、やっぱり、中学生位にしか見えない。

「しかし、雷を治癒に利用する。か……モノは考えようだな。あの人もかなり凄い人物なんだろうな。」

俺も、本腰入れて研究するかな。

神に貰った能力になんて頼らずに戦っていきたいしな。

遊びでは能力を使うが。

~~~~~おまけ~~~~~

その頃のライナ。

アリアドネー内のとある学校のとある中庭。

地面には芝生が引かれ、建物の隙間からは心地好い陽光が射し込んでいる。

そんな場所で、ヘラス帝国帝都ヘラスで購入した最高級品である枕を使い、情眠を貪っている男がライナである。

「むにゃむにゃ……まだまだ……食べる……」

ベタだ。

最近はもう聞くことが無いほど、ベタな寝言だ。

「むう……ふあんだ？　ふうあ……」

欠伸混じりだが、何かを感じ取り、目を覚ましたようだ。

「ちょっと、どういうこと!？」

あなた、何でこんな所で寝てるの!！」

怒鳴るように質問するのは、頭に大きな角を生やした白人系の少女だった。

年齢は、ライナの見たと同じ位だ。

「君は？」

身を起こすこともなく、尋ねる、ライナ。

「私はセラスです!……じゃなくて、何で! あなたはこんな所に寝転んでるんですか!」

「日射しも気持ち良いし、芝生も気持ち良い。昼寝には持ってこいの場所だと思わない?」

「そうじゃなくて、今からここは私たちのクラスの飛行訓練に使うんです。」

ライナが、少女の後ろを確認すると、40人程の女子生徒がいる。



「それは悪かった。別の場所で寝ることにする。」

「待ちなさい。」

立ち上がって、別の場所に向かおうとするが少女、セラスに止められる。

「何？」

「あなたが何処の学部かは知りませんが、今は授業時間のはず。堂々とサボり発言をされたのをみすみす見過ごす訳にはいきません。」

「はあ……」

やれやれとばかりに首を振りながら、ため息を漏らす。

「何ですかその態度は！

あなたもアリアドネーの学生ならもつと向学心をですね！」

「委員長ー！。もう良いじゃん。ほつときなよ。」

「ガレット、しかしですね。」

「ふっ！」

セラスの目が同級生の方を向いた瞬間、ライナは瞬動、虚空瞬動を併用し。

「まったく………なっ！ 居ない、消えた。」

屋根の上まで移動した。

「厄介そうな人に目を点けられたな………ふあゝ………静かなとこ探そ。」

欠伸をしながら、枕を片手に屋根から屋根へと跳び移っていった。

一方、突然目の前から消えられたセラスはというと。

「なんなんですか、あの男は！ 次に会った時は 「委員長ー！。先生来たよー！。」 あっ、分かりました。」

何故か燃えていた。

この後、アリアドネー内でライナとセラスの鬼ごっこはしばらくの間名物となるのだった。

#### 第十四話（後書き）

セラスの性格が大変なことになってる。

でも、大丈夫ですよ？

若さ故のなんとやらで、生徒時代から原作のような性格している訳  
ないですよ。

それはそれとして、ライナのヒロイン的な立場としてセラスは登場  
しました。

これからも段々と原作キャラを登場させる予定なので、よろしくお  
願いします。

## 第十五話（前書き）

なんでもこうなった……

自分で書いてて指が暴走してしまいました。

## 第十五話

キンコンカーンコン

「はい、それじゃあ今日の授業はここまで。」

各自、予習復習をしっかりとするように、日直。」

「起立　　気をつけ　　礼。」

「「「「「ありがとうございます。」「「「「「

「ふう……」

教室から出て一息吐く。

アリアドネーで講師兼研究員を始めて大体半年になるが、いまだに授業に慣れない。

「先生ー、助けて下さーい。」

廊下の曲がり角から現れたのはライナ。

ここでは生徒全員に先生と呼ばれているから、この呼び方が全然違和感がない。

「どうした？」

一応聞くが、理由は分かっている。

「セラスに追われてるんです。」

やっぱりか。

「はぁ……よく飽きないな。」

「先生、僕ここに隠れてますんで、あっちに行っただって言ってください。」

「はいはい。」

廊下の窓から外に出て、窓の縁に手をかけて隠れる。

窓からぶら下がってる状態だが、こっちから見えなくなった。

「あ、ナナナナミ先生、こんにちは。ライナを見ませんでしたか？」

「ああ、その窓にぶら下がってる。」

「ちょ、先生！」

「そこかー！」

窓から手を離して、虚空瞬動で逃げるライナ。

「待てー！」

ホウキにまたがって窓から飛び出し、ライナを追うセラス。

最初の方は瞬動に対応出来ずに逃げられていたが、最近は追い縋る事が出来るようになっている。

「これは成長したと褒めるべきか、窓から飛び出した事を叱るべきか、しかし、ホントよく飽きないな。」

窓の外で鬼ごっこを続けている二人を見ながら一人ごちる。



「あ、またセラス先輩とライナ先輩がやってるよ。」

「本当に仲が良いよねあの二人。」

「え？ なにそれ？」

「知らないのー？ 有名だよ、あの二人。」

ワイワイキャツキャツと会話している生徒から放れて、一旦職員室に戻る。

職員室では授業に使った教材を片付けて、日誌をつけておく。

「来週からは実習を入れれるな。」

「実習室の使用許可を貰ったかないな。」

来週の授業計画を立てながら、今日の分の仕事を終わらせ、主任と総務に実習室の使用許可申請を出してから、研究室に戻る。

研究室は、相変わらずの曼陀羅模様と幾何学的な魔方陣に埋め尽くされた床と天井。

流石に壁の落書きは消したが。

まあ、壁の落書きが有ったら生徒が研究室に来た途端にかなり引くがな。

こつ、入った瞬間に一步後退りするんだよ。

あれを見てからは、即行で落書きを消したな。

「さつて、今日は影に形と共に、性質を加えるものだったな。構成は大体決まってきたし、後は細部を詰めるだけだな。」

これが完成すれば、俺でも疑似属性魔法が使えるようになるはずだ。

じゃ、早速影に炎の性質を与えて……………お、熱くなってきたな。

このまま、温度を上げて……………空気中の酸素に反応させれば……………お、火が出来てきたな……………これを影で取り込んで融合させて……………完成と。

やっぱ、時間がかかるな。

そもそも、手順が面倒だ。

影の温度を上げて、火を作り、それを影で取り込み融合。そして、安定させて、影の形を変え、燃える槍や剣を作り出す。

もつと、効率の良い方法を探さないとな。

それでも一応属性擬きは付与出来るけど、まだまだ、甘いしな。

「はぁ……要研究だな。

改善の余地もまだまだ在ると。」

これは、完成まで、長くなりそうだな。

昔に思いついてりゃ、良かったんだけどなあ。

その後、雷と風の属性の研究を終わらせる頃には、窓の外が暗くなっていたので、器具を片付けて、今日の研究を終わらせた。

「んうー……はぁ……焦ってもしょうがないし、食堂でゆっくり飯を食うか。」

研究室にしっかりと鍵を掛けてから、食堂に向かう。

食堂は生徒、職員両方が利用するので、そこそこ大きな規模をしている。

ラーメン定食を注文し、角の席でラーメンを啜る。

たまには中華も良いな。

「せえん…せえい……」

地の底から這い出たような声を出しながら、近寄ってくるゾンビ…  
もとい、ライナ。

「まったく、だらしない。ホラッ、もっとシャキツとしないか！」

「ぐえ……」

そのゾンビライナの後ろに立って、バチンとなんとも痛そうな音を響かせながら背中を叩くセラス。

「ナナナナミ先生もなんとか言ってやって下さいよ。」

なんとかって、なんと言えはいんだよ。この場合。

「えっと、ドンマイ？」

こんな所でもライナの二つ名を言うとは思わなかったぞ。

「シクシクシクシク……」

体育座りですすり泣くな、鬱陶しい。

「で、お前らも飯食いに来たんだろ？  
どうせならここで食うか？」

「あ、ご一緒させてもらいます。」

「……………」

返事がない。ただのしかばねのようだ。

「さっさと起きる。」

「がっ……」

死人に鞭打つような真似を……

そこからなんやかんや有りながらも、俺の対面に並んで座る二人。

メニューは、セラスが洋風定食みたいなもので、ライナがカツ丼みたいなものに、セットで豚汁とサラダが付いている。」

「ナナナニ先生はもうここでの生活に慣れましたか？」

定食の主菜であるハンバーグをつつきながら、話すセラス。

「生活にはな、けどやっぱり、授業にはなかなか慣れないな。」

「そうですか、教員の仕事は大変なんですね。」

「簡単に言ってくれるな。」

「騎士団は騎士団で大変ですからね。  
最近団長も任されるようになって責任も増えてきてるんですよ。  
それに、これも面倒を起こすし。」

「痛えっ！」

フォークでライナを刺しながら言う。

セラスは真面目だったはずなのに……こうやって見ると面影も無いな。

何がセラスをこうも変えてしまったんだろ？

「へえ……………あれ？ セラスが所属しているのは、戦乙女旅団、だろ？」

ライナとは関係がな……………ああ、そういうことね。」

「何ですかその納得したような顔は！

違いますからね！ 今何を考えてるか知りませんが、絶対に違いますからね！」

「があ————！ 刺したままで動かすな————！」

刺したままのフォークをグリグリと動かして肉を抉る。

多分、無意識なんだろうけど、出血がヤバイことになってるから、そろそろ止めておけ。

「分かってるから、落ち着け。

ライナがヤバイ。ものすごい勢いで顔から血の気が引いていつてる。

「

「分かってるって何をですか！

違いますからね！ ホントに違いますからね！ これのことなんてなんとも思っていないさんからね！」

こういうのをツンデレとか言うのかな？

でも、照れ隠しでフォークを突き刺すというのもどうかと？

それより、こっちな。

顔色がとうとう蒼から白になってきている。

ライナは不老であって不死ではないし、ほっとくと流石に不味いだる。

「セラス！！」

声に魔力を乗せて発する。

「っ！ はい！」

おし、反応があった。

「とにかく落ち着け。深呼吸しろ。」

「はい。すー、はー、すー、はー。」

声に魔力を乗せたままなので素直に言うことを聞く。

これが何時も通りなら効果はないだろうが、混乱していて、魔力耐



性が下がっていたから上手くいったただけだ。

「今の内に……」

ライナの肩に刺さっているフォークを抜いて……げえ、肩の骨まで届いてやがる。

「えーと、汝が為にユピテル王の恩寵あれ。『治癒』  
後、補肉剤も注射しといてと。」

普段なら無詠唱でも良いんだが、この怪我は詠唱がないと無理そうなので、詠唱しておいた。

ぐじゅるぐじゅぐじゅと肉が蠢いて傷口を修復していく。

見た目がグロテスクなので、周りに見えないようにこっそり手で隠す。

「これで一安心だな。」

「ああ、痛かった。  
セラスは？」

「隣で深呼吸してるぞ。」

言葉通り、セラスは治療の間からずっと深呼吸を続けてる。

「とつとと食つとけ、セラスが正気になったらまたどうにかなるかも知れないぞ?」

慌てカツ丼をかきこむ。

「じゃ、俺は戻るから。」

そこら辺の血は自分でなんとかしとけよ。  
お前の魔法なら出来るだろ?」

トレイを持って席を立つ。

しかし、ライナは何で生徒扱いされてるんだ?

俺は助手としてここに紹介したんだけどな。

うーん、謎だ。

「ごちそうさま。」

返却口にトレイを置いて部屋に戻る。

寮の扉を開けると、置いてあるのはベッドのみ。

他のものはすべて影の倉庫に入れているから当然と言えば当然なんだが。

影からタオルを取り出してシャワーを浴びに行く。

ここでの生活には本当に慣れたし、楽しいことも多いからな。

充実してると言えば、言えるよな。

シャワーを浴び終え、着替えてからベッドに寝転がる。

特別な事の少ない。

同じような繰り返し返しの日常。

それも存外悪くない。

俺の意識は闇に沈んでいった。

## 第十五話（後書き）

セラスの性格がえらいことに。

しかし、ライナも特訓のせいで感覚がおかしなことになっています。

## 第十六話（前書き）

今回は大戦までの繋ぎ回みたいな者です。

## 第十六話

アリアドネーで研究を進めて十数年。

何本か論文も書き上げて、研究者としては問題もなく暮らしていた時にそれが興った。

研究の最中に教師、講師、研究員全員に緊急召集がかかった。

会議室に着いた時には三分の二程の席が埋まっていた。

ちょうど、先輩（アダ名）の隣が空いていたので、そこに座る。

先輩は見た目高校生位には成長している。  
十数年で中学生が高校生に成長したのだ。

そんな下らない事は置いといて。

「先輩、なんの緊急召集だと思います？」

「んなこと知るかよ。」

しかしまあ、ただ事じゃねえのは確かだな。」

「そりゃ、緊急召集自体が………何年ぶりでしたっけ？」

「七年ぶり！」

「そうでした、そうでした。」

あの時は生徒の集団失踪でしたね。」

「そうだな、そういえばあん時はお前のお手柄だったな。」

「いやあ、それほどでも。」

「しかし、本当になんなんだ？　ここ最近は特に問題らしい問題は起きてないはずだろ？」

「総長の説明があるまで分かりませんね。」

「そうだなあ。」

いくらか先輩と雑談していると席が全て埋まり、総長とそれに続く

ように補佐官が入ってきた。

ちなみに、高齢だった先代総長は引退し、若き総長としてセラスが二年前から就任している。

補佐官は同時にライナが就任した。

つまり、アリアドネー騎士団のトップツーにあの二人が就任した訳だ。

余談だが、アリアドネー騎士団のトップは総長と呼ばれるが、研究員にもトップとして学長と呼ばれる人がいる。……………らしい。

なんせ、会ったことがない、ずっと研究室に籠りっぱなしの変人だとは聞いたが、なんの研究かとも全く知られていない。

先輩曰だが、「あの変態だったらなあ……………会つと分かれれば防護服位は用意をしておけ、運が良ければ薬品をぶっかけられる程度済むぞ。

運が悪けりゃ諦める。」だそうだ。

こう聞かされちゃ会いたいと思わないだろ？



と、セラスの話が始まるな。

「皆さん。集まってもらってありがとうございます。  
本日は重要なお知らせがあります。」

ここで一拍空けて、こちらの反応を見る。

特に異論反論も無いので、そのまま続ける。

「知っている人もいるかもしれませんが、ヘラス帝国とメガロメセンブリアを中心としたメセンブリーナ連合が戦争を興しました。」

戦争か……

「アリアドネーに対しても帝国、連合、双方協力要請を出してきました。」

確かにアリアドネーはどんな権力にも屈しない世界最大の学術都市国家だ。

この力を使えば、戦争を優位に進められるだろうけど。

「が、アリアドネーはこの戦争に対して、あくまで中立の立場を貫

きたいと思っています。」

ま、それが妥当だろうな。

ここには沢山の生徒がいるんだ、生徒を戦争に巻き込むようなこと  
してはいけないだろ。

「しかしながら、それを個人にまで徹底する気はありません。

皆さんにも故郷の事      （長いので割愛。）

お知らせは以上です。それでは解散してください。」

要は戦争に参加したい奴はしても良いよ。但し絶対に生きて帰って  
来ること。だな。

アリアドネーとしての肩書きは一時無くなるが、戻ってきたらまた  
戻るという話だ。

けど、この戦争は結果が既に見えてるな。

国力や兵士の数。魔法使いの事から考えても、七三で帝国の勝ちだ  
ろうな。ラカンもいるし。

約束もあるから戦争に参加するが、どうせなら勝つ方に付くか。

戦争に参加する事をセラスに伝えて、部屋に戻った。

ライナは……無理だろうな、総長補佐が参加したら大問題になるわ。

部屋に着き、影の中から愛剣である神剣を取り出す。

鞘から抜き放ち、室内で出来る一通りの型を繰り返す。

「少し……鈍ってるか……」

剣を鞘に戻して影に戻る。

代わりに、全ての斬魂刀に変化する刀をベルトに差し込む。

「戦争ならこっちのがいいか。」

この刀でも何度か型を繰り返す。

「ふう………こんなもんかな。」

自分で満足出来る程までになったので止める。

刀を一旦外し、スーツを脱ぐ。  
そして、久しぶりに黒い着流しと羽織を着る。最後に腰に刀を差し  
て着替えの終わりだ。

「よし、行くか。」

武装錬金「ヘルメスドライブ」

瞬間移動でヘラス帝国帝都ヘラスに移動する。

「到着。」

それじゃあ、目的地は……あっちだな。」

目的地はまだ行ったことがないから歩いて向かう。

「ここだな。」

「おい、貴様。何者だ！？止まれ！」

「おい、何をやっている！？」

門番が何か言ってるがこの際無視だ。

物事をさっさと進めたいんだよ。

門番は衛兵が出てくるが、無視して進んでいく。

「な、剣が刺さらない!?」「魔法も効果が無いぞ!」「なんて固い魔法障壁だ!」

「ここだな。」

やたらと豪華な扉を蹴破って中に入る。

「陛下。危険です! 御下がり下さい。」

俺が入ってきてても動じずに座り続けている男。

こいつが皇帝だな。

「あんたが皇帝だよな。」

「如何にもそのとおりだ、侵入者よ。」  
「陛下!」

手を上げて、臣下を抑える皇帝。

「よい、しかして、余に何用だ？」

「ああ、用件は単純だ。

今回の戦争に帝国側として参加してやるよ。」

「ほう……」

「そのような事が信用出来」「面白い！」「陛下！」

「面白いぞ、侵入者いや、‘白翼の魔王’、とでも言った方が良いか？」

「懐かしい呼び方だな、まあ呼び方なんかはどうでもいい。で、どうする？」

「ふふふ、その力、帝国の為に振るってもらおうか。」

「了解、契約成立だな。」

「ついでに、最近生まれた俺の娘の護衛兼世話役してもらおうか。」

「それは流石に了解出来ないな。」

大体、今日初めて会った相手に娘を預けようとするなよ。

「ちつ、流れで行けると思ったのに。」

「陛下、口調が……」

「別に良いだろ。」

ここにはお前とこいつしかいないんだから。  
そつだ、魔王よ。名はなんと言つ。」

「七々己 一希だ。」

まあ、戦争の間だけだが、仲良くいこうや。」

「そつだな。」

皇帝が握手を求めてきたのでそれに応える。

「で、どうだ？ テオの護衛の話は。」

「馬鹿か、お前は。」

「俺の娘だから将来有望だぞ？」

「娘のことより、戦場の事を考えろよ。  
それにこのこともな。」

正直衛兵が弱すぎるぞ。」

「はっはっはっ、お前と比べたら皆弱いさ。  
なあ、史上最高額の賞金首さん。」

「それだったら、その賞金首に娘を護衛させようとしたお前はどうかんだよ。」

皇帝以前に父親失格じゃねえか。」

「良いんだよ。お前の目を見て信用出来ると俺が思ったんだから。  
それで、失敗したら俺の見る目がなかっただけさ。」

「くくく、あんたも面白いな。」

「（もう、この二人嫌だ。  
うっ、胃が……キリキリとした痛みが……）」



握手をして、すっかり意気投合した皇帝と魔王。

それを見ている皇帝の側近は辛そうな顔をしながら、腹を押さえていた。

## 第十六話（後書き）

タグにご都合主義追加しようかな……。

普通ならこんな簡単に交渉がいくはずないですが、作者にはこれが限界です。

## 設定話（前書き）

大戦に入る前の設定です。

一度、整理しておきました。

## 設定話

ナナナミカズキ  
七々己 一希

身長／188センチ

体重／74キロ

この作品の主人公。

神様の暇潰しで異世界にトリップした。

一回目のトリップで様々な経験をしてしまい、少し考え方がおかしい。

二回目のトリップでネギまの世界に来た。

身体能力や魔力、気は世界最高峰。

二億年もの長い間鍛練を続けていたので、戦闘技術も人間では辿り着けないような極地にいる。

最初はただ鍛練を続けていたが、人類が現れてからは世界中を旅した。

一応、麻帆良に武家屋敷風の自宅を所有している。

戦争直前はアリアドネーで、講師兼研究員をしていた。

容姿は、昔々に賢者の石＋大罪の結晶（正義）＋黒い核金から創り出した紅い核金を心臓に取り込み同化した事で女顔になっていた。

現在の顔は、凜々しい系のお姉さんみたいな感じ。見た目20代前

半。かなりの美女……男なのにな。

核金の影響で髪の色は螢火色に、目の色は深紅、肌の色はアルビノかと思うほど白くなった。

手足もかなり細く、女性のようだが、かなりの怪力。

今は力が強くなりすぎたので、右手のリストバンドで三分の一、左手のリストバンドで四分の一、胸に刻んでいる二重の限定霊印でそれぞれ五分の一、の計三百分の一まで、力を抑えている。

ちなみに、封印状態ではエヴァより少し弱いレベル。

リストバンドを一つ外せば、造物主レベルには成れる。

神様にもらった能力は、

金色のガッシュに出てくる全ての術とアンサーターカー。

ブリーチに出てくる全武器、全能力。

武装錬金に出てくる全ての武装錬金。

鋼の錬金術師の錬金術。

とある魔術の禁書目録の全魔術。

だが、ネギまの世界ではほとんど使う気はない。

遊びで使おうかな？位の気持ちである。

ネギまの世界では、魔法は、影魔法と無属性魔法だけが使える。

また、咸卦法と、オリジナルの霊卦法（霊力＋咸卦）、天卦法（天使の力＋咸卦）、天霊卦法（霊力＋天使の力＋咸卦）を纏って、武

術を使う。

ライナとエヴァンジェリンの保護者でもある。

懸賞金1700万\$の賞金首でもあり、通り名は

「天使の羽持つ魔王」（後に白翼の魔王になった）「影統べる女王」  
「破壊の皇帝」「無差別魔法使ってるけど隣の奴が一番被害出てる」  
等々

大戦も偽善との口約束と暇潰しで参加を決めた。

ひとまず、こんな感じ。

ヤッザキ 八咲 偽善  
ゼロザキ 零崎 組織

身長 / 不定  
体重 / 不定

とりあえず、作者から一言。「なんだこいつは？」

影が薄い。なのにやたらと掻き回す。キャラが定まらない。等の問題が多くて、登場させるのが億劫になる。

作者的には一番めんどくさいキャラ。

この二億年何をしていたのかは不明。

話振りからは、色んな世界を転々としていたようだが、やっぱり不明。

容姿は、色々、一番最近では、猫のような着ぐるみを着ていた。

神様にもらった能力は、

刀語の全技能。

めだかボックスのアブノーマル、マイナス。

ワンピースの覇気。

王の財宝。

だが、見稽古や、完成があるので、見るだけでほとんどの能力を見とる事が出来る。

転生者が使っていた、無限の剣製も習得した。

この先も何をするのか、作者も何をさせたいのかは不明だが、なんとかキャラを立てていきたいと思っています。

ライナ・ナナナミ

転生者だが、前世の記憶も、神様に会った記憶も全くない。

容姿はライナとフェリスを足して割った感じ。

髪は金髪、目は黒色。

見た目年齢は15歳で不老になったが、前後10歳程度は変化出来る。

一応、能力としては、伝勇伝のライナの複写眼とフェリスの剣術をもらっている。

昔、一希にヨーロッパの辺りで拾われた少年。

剣術は、フェリスの剣術を雛型にしているが、二刀流に変えている。

見ただけでその魔法を使えて、咸卦法も使える。  
魔法剣士タイプ。

最近、セラスと付き合い始めた。



懸賞金100万\$の賞金首でもあり、通り名は  
「魔王の従者」「哀愁漂う愚者」「睡眠を求める者」「えっと、ド  
ンマイ」等々。

ヤツザキ 八咲  
アンラ 安楽  
ゼロザキ 零崎  
シキオリ 識織

前の世界にいた魔神で、偽善にベタ惚れ。

そして、ヤンデレ。

偽善の為なら世界を一つ滅ぼす。

偽善に嫌われたら、世界と共に滅びる。

そんな思想の持ち主。

邪神アンラ・マンユだが、ギゼンと会って惚れてしまった。

それ以来、偽善にベタベタ。

偽善がどんな変装、変身をしようが、一瞬で分かるらしい。

魔神だったが、偽善と共に冥界で暮らしていたら

## 設定話（後書き）

ちなみに、ラカンもエヴァも原作より強くなっています。

## 第十七話（前書き）

影魔法は詠唱が存在しないからオリジナルを出しやすい良い魔法だ  
と思います。

## 第十七話

どうも、一希です。

とうとう戦場まで来ました。つまり、今日は俺の初陣です。

しかし、流石は魔法世界の戦争。

空を飛び回っているのは杖にまたがった魔法使いに、巨大な鯨をモチーフにしたような戦艦群。

俺はその中でも、最前線を飛んでいる一機の戦艦の甲板に立っていた。

最前線と言っても、まだ連合の艦隊とは距離があり、本格的な戦闘は始まっていない。

「カズキ殿、このような所でどうするつもりですか？」

こいつは、カゲタロウ。

俺と同じ影使いということで同じ戦艦に割り振られたらしい、そこそこの実力者だ。

この戦艦にはもう何人が影使いが乗っている。皆、俺の魔法が見たくて自分から志願したらしい。

「いや、精霊砲も届かない遠距離から、魔法で奇襲をかけたら何機落とせるかなと思って……………」

「……………」

カゲタロウの視線が痛い。

仮面で表情は見えないけど。

「やってみるかな、カゲタロウ、艦長に連絡入れといて。

相手に攻撃を開始するって。」

カゲタロウが、何するつもりだこいつ？みたいな目をしているが、気にせずに影を集中させる。

放つのは十の影槍だが、鋭さと切れ味を最大限にまで高める。

限界まで魔力と影を集中させ、放つ。

「影の剛槍」

放たれた影槍は6?以上離れた連合の艦隊を貫いていく。

途中、魔法障壁もあつたようだが、そんなものは関係ないように戦艦を貫いていく。

「届いたのか……………」

「バツチリ、届いてるぞ。

ここから……………」

戦艦に刺さっている影槍を戦艦を両断するように動かす。

「なっ!!?」

狙って刺した10隻とその奥の斜線上にいた何隻かの戦艦を全て真っ二つにする。

「こんなもんか、しっかし、脆いなあ。」

「（なんて無茶な…………こんな使い方、誰も真似出来ないぞ。ん、無線か……………」

切られた戦艦はそのまま墜ちていくが、それでも30隻程の戦艦が残っている。

「さて、次は……………」

再び、魔力を集中させようとすると、

「カズキ殿！ 艦長から自重してくれと連絡が。」

「ええ……………」

「せめて、戦艦の射程範囲までは我慢してくれ。だそうです。大方、他の艦が手柄を独り占めされるのを恐れて、言ってきたのでしよう。」

「この艦の射程は？」

「おおよそ、1？ 前後ではないかと……………」

「なら、後5？ もあるじゃねえかよ。ああ、もう、寝る。始まりそつになつたら起こせ。」

甲板にどかつと寝転んで、目を瞑る。



「……………十分もかからないんだが……………」

カゲタロウが何か言ってる気がしたが、気にしない。

「……………殿……………キ殿……………カズキ殿！」

「うるさい、切り刻むぞ。」

「ひっ！」

くそ、ちょうど眠りが深くなる直前に起こしやがって。

「あー、頭が重い。中途半端に寝て余計に眠気が……………」

頭を振って、眠気を振り払う。

「所で、カゲタロウは何をしてるんだ？」

影槍に囲まれて身動きをとれていないカゲタロウを見やる。

「そろそろ、射程に入るから、起こそうと、したら、突然、囲まれた。」

「そこそこの実力者なんだから防げよー。」

「あんな、展開の、速さに、追いつけるか。」

喋るのも辛そうなので、影槍を解除する。

「はあ、はあ、……………艦長から攻撃の許可が出た。私も直に出撃する。」

「ふーん……………」

影を伸ばし、糸状にして、連合の戦艦全てに巻き付ける。

極細くしているから、誰も気付いていない。

「また、今度は何をしてるんだ……………」

失礼、カゲタロウは気付いていた。

「そして……一気に引き絞る。」

戦艦が徐々にずれていき、ぶつ切りになる。

「連合の艦隊全滅。

後は、そこらを飛び回っている魔法使いだけだ。  
じゃ、俺は船室に戻るから、よろしく。」

「（必要あったのか、帝国の戦力は？）」

どことなく哀愁を漂わせながら、帝国の艦隊を眺めるカゲタロウ。

必要なかったな、最悪俺一人でも一国相手に勝てるし。

とつと船室に戻って寝直す。

睡眠キャラはライナだった筈なんだけどな。

「止めた。」

キャラが被るのは嫌だ。

としても、やることなんてないしな。

『連合が撤退を開始しました。連合が撤退を開始しました。』

戦艦を全部墜とされているのに、撤退もなにもないだろ。

そのまま何隻かは侵攻していったが、俺の乗っている戦艦は帝都に帰艦していった。

王宮……皇帝だから皇宮か？に到着した。

俺は自分の部屋として、皇宮の離れの一室をもらっている。

もちろん、監視の意味もあるのだろうが、設備も良いし、世話役にメイド（戦闘訓練を受けているようで動作に隙が少ない）も付いているので、文句は言っていない。

まあ、夜中にまで覗き見してきた奴がいたが、ピンポイントで殺気

をぶつけて、気絶さしてやった。

自室に到着したので、鍵を開け中に入る。

「？ 鍵が開いてる？

まさか……………」

「む、おお、帰ったかカズキよ。」

突然飛び付いてきたのは、この帝国の第三皇女のテオドラ。

飛び付いてきたので、体を反らして避ける。

ずざざざーと滑っていく第三皇女。

「何をしてるんだ、このじゃじゃ馬皇女は。」  
皇女殿下一体何用ですか？

「何故避けるんじゃない！ それに本音と建前が逆じゃ！」

「おっと、それは失礼。

何分、正直者な性分ですて。

それで、改めて何用ですか？」

「正直者と言うこと自体が嘘じゃろうが！」

「はあ、それで用件は？」

俺も疲れてる訳ではないが、休みたいんだが。  
いい加減にしないとお前の語尾を「じゃ」「じゃなくて」「にや」「にす  
るぞ。猫耳付きで。」

多分、こんな感じ「何故避けるにや！ それに本音と建前が逆にや  
！」……………うん、変なファンがつきそうだから駄目だな。

「むう、ごほん。」

特に用と言うほどじゃないのじゃが……………」

「なら、戻れ。」

戦争中なんだから仕事もあるだろ。」

首根っこを掴んで外に出そうとする。

そうは言っても、十そこそこの少女に仕事なんてないだろ。

ついでに、テオドラの容姿は頭に大きな角があり、褐色の肌の少女  
だ。

といっても、ヘラスの種族は長命が多いから、しばらく少女の姿な  
んだろう。

「離すのじゃー!!」

「このような扱いはやめるのじゃー!!」

手足をばたつかせるテオドラ。

こんなのが皇女で帝国は大丈夫なのか？

人望はものすごくあるらしいのだが。

「で、何しに来たんだよ。」

手足をばたつかせるのにも疲れたようなので、椅子に座らせてやり、俺もベッドに腰掛ける。

「うむ、またお主の話を聞きたくなってな。」

あゝ……過去の俺よ、何で暇だからってあんな気まぐれを出した。

その気まぐれとは、帝国に入った始めの頃。

皇帝の許可は貰えても、まだまだ軍の信用が得られず、戦場出れなくて暇だったので、たまたま居たテオドラと話をしていたら懐いた。

うん、なんか知らんけど懷いた。

またその場にたまたま皇帝が通り掛かって「それだけテオが懷いたのなら、護衛もやっちゃいなよ。」みたいなノリになって………。

皇帝公認で俺の部屋に遊びに来やがるんだよ。  
このじゃじゃ馬皇女は。

「一応、俺は戦争帰りなんだが……」

「おお、そうじゃった。聞いたぞ大活躍じゃったそうじゃな。戦争なんて早く終わらすに越したことはないのじゃが、カズキが活躍するのは嬉しいぞ。」

「皇女にここまで誉められるとは、恐悦至極です。」

「その所々で変な敬語を入れるのは止めぬか、妾のことはテオで良いと言っておるじゃろ。」

「へいへい、じゃテオ、今回は戦争の話をしてやろうか？  
といっても、帝国の被害なんて本当に軽微なものだけだな。」



「それで構わぬ。

むしろ皇女として、知っておかなければならぬことじゃ。」

「了解……えーと、今回の戦場は……」

「戦場や出撃規模は知っておるぞ。

最低限軍議の事は聞かされておるからな。

妾が知りたいのは報告書にも載っておらぬような事じゃ。」

「報告書にはどんな風に書かれていたんだ？」

「確か、我が軍の被害は皆無。カズキ殿の活躍もあり、連合を撃退する事に成功。引き続き、追撃する。………のような感じじゃったかな。」

「そんな風に報告されてたのか。」

「実際はどんなじゃったのじゃ？」

「そうだなあ……先ずは連合の艦隊から6？ほど離れた所から影魔法で奇襲をかけて」

戦場で起きた事を細かく、影で人形を作って再現しながら話してい

く。

この影を使う芸の細やかさが余計に懷かれる原因になるとはこの時俺は思いもしなかった。

てゆうか、気付けよ俺え。

「そうかそうか、連合の艦隊を一人か……やり過ぎじゃろ……何のために帝国の艦隊と鬼神兵を出撃させたんじゃ。」

「そうは言っても、ちゃんと皇帝からは「好きにやれ」って、腹抱えて笑いながら許可はされてるんだが。  
大臣は頭抱えてたけど。」

「今度からは大臣を労ってやろうかの……」

「優しいなあテオは、そんなテオにはアメちゃんをプレゼントだ。」

「わーい！ ありがとう。わあ、このアメちゃん美味しいー……って、何でじゃー！」

「ノリつつこみとは……やるなテオ、俺はお前を甘く見ていたようだ。」

「ちょ、なんでそんな真顔、妾はなにもおかしな事してないよね？」

「甘く見ていたが、実はそのアメの中心には……」

「え？ まだ、このテンション続くの？」

テオの口調が崩れてきてるな。

「ブレアを仕込んでいる！

まあ、別に毒でも何でもない調味料なんだが……」

「ブレア？」

「そう、ブレア。

試しに噛んでみな。」

ふむ、と今まで嘗めていたアメを噛み砕く。

「？（ガリッ）……………！ 全かゞ？ 中？？！

〒@？\*§ あ！……！」

言葉に出来ないようだ。

ちなみに‘ブレア’が気になる人は調べてみてくれ。  
ただし、食べること、嘗めることは絶対にオススメしない。

調味料なのに肌に付くだけで火傷するから。

「  
っ！！」

口をパクパクさせているが、声が全く出ていない。

「しかし、ここまで効果が出るのか？  
口の中も周りも真っ赤になったぞ。」

もう少しで火を吹きそうな勢いで悶えるテオ、流石に可哀想なので、  
治癒魔法をかけて治してやる。

「おい、テオー、大丈夫かー。」

やり過ぎたかな？

「……………馬鹿か貴様はー！？」

殴ってきた。

避けるのは簡単だが、可哀想なので受けてやる。

「なんてものを食べさせてるんじゃないー！

口の中が熱くて痛くて死ぬかと思った、いや、口の中は確実に死んだぞー！」

「悪かった、こんなに効果があるとは思わなくてな。とりあえず、これでも飲んどけ。」

ビン牛乳を渡してやる。

何でこんなものがここにあるかは気にしないでくれ。強いて言うなら補正だから。

何補正かは言わないが。

ところが、テオが警戒して牛乳を飲んでくれない。

しゃあない。

「貸してみろ。」

「あ……………」

テオから牛乳を取り上げて一口飲む。

「ほれ、これにはなんも仕掛けてないぞ。」

「あう……」

牛乳ビンを見て紅くなるテオ、大方間接キスか何かを考えてるんだろ。

ませがきが。

牛乳も飲んで、完全に回復したテオは俺と軽く話した後、部屋に戻って行った。

その夜。

ドカーン！

「何事だ？」

突然、部屋の扉が破られる。

「『『『我々はTLM（テオドラを愛する会）』』』」

「はぁ？」

入って来たのは、黒色の覆面と黒色のローブ着て、大鎌を持った集団。

「貴様は」「今日の夕方」「テオドラ様と楽しそうに話した後」「テオドラ様に悪戯した」「おまけに間接キスなんてイベントしやがつて」「よって罪には罰を」「テオドラ様の敵には血の粛清を！」

「……………本心は？」

「『『『羨ましいんじゃあ！！！！』』』」

馬鹿だなこいつら。

「『『『死に晒せえ！！！！』』』」

全員一斉に襲いかかって来るが、

ガキキキン

「「「「「な、鎌が!?!」」」」」

当然、狭い室内で大鎌なんて長物を複数人で使えるわけない。

「まあ、なんだ……お休み。」

「「「「くそつたれがああ!!」」」」」



## 第十七話（後書き）

原作キャラ、カゲタロウとテオドラ登場です。

口調や性格が変だったら教えてください。

では、よろしくお願いします。

## 第十八話（前書き）

今話は原作のあの人達が登場します。

楽しく読んでもらえたら幸いです。

## 第十八話

皇宮・謁見の間。

「で、オスティアの回復作戦ね。  
あんな、歴史と伝統だけの小国にそんな価値なんてあるのか？」  
「人誅！！」

「我々の目的は国ではない、黄昏の姫巫女だ。  
この作戦には是非ともお主にも参加して貰いたい。」

「死ねえー！！」  
「黄昏の姫巫女ねえ……それより、うぜえ！ なんなんだよお前らは、一応皇帝の前だろうが！」

「構わん。許す。何より面白い。」

「皇帝、てめえ！」

「「「我らTLMを舐めるなあ！！」」」

「はあ……なんで、第三皇女だけこんな人気なんだ？  
第一皇女と第二皇女も居るだろ？」

「「「おばさんには興味無いわー！」「」

だめだこいつらはやくなんかしないと。

（ガチャ）その時、TLMにとっての

地獄の扉が開いた。

「「貴方達……何かおっしやいました？」」

扉の先には二人の阿修羅が立っていた。

なんて、殺気だ。

俺の全力と同レベルだと。

そんな殺気を当てられたTLMメンバーはというと

「「「ひい~~~~~」」」

顔面蒼白で震えていた。

「「「あちらで少しO・H A・N A・S I しましょうか」「」

消えていくTLMメンバー！。

俺は静かに合掌した。

「それで、返事は？」

「ん、別に良いぜ。参加してやるよ。」

「」「あれは言葉の綾と言つか……その……あの……」「問答無用」「ギャーーーーー……………」

扉の向こうから何か聞こえた気がする。

「皇帝……………」

「骨は拾ってやるさ。」

皇帝直々に骨を拾ってもらえるとは、あの阿呆どもも満足するだろ。

多分、テオだったらもっと喜ぶだろうけど。

「それで、作戦の開始は何時なんだ？」

「明日の夜だ。」

「は？」

「だから、明日の夜だ。

他の部隊や戦艦、鬼神兵の準備は完了しているから安心しろ。」

「なんで、そんな急に……」

「すっかり忘れ……お前なら何時連絡しても変わらないと思ってな。」

「忘れてたんだな。」

「ギクッ！」

忘れ、まで言ったら大体分かるぞ。ギクッまで口に出すし。

「まあ、良いや。

どうせ、俺は遊撃だろうし。」

初陣以降は、戦艦に乗らずに遊撃として連合の艦隊を墜としている。  
戦艦の撃墜数はもう、100隻を越えている。  
帝国の歴史上の最高記録らしい。

「そうだ。臨機応変に頼むぞ。」

「へいへい、了解しました。」

謁見の間から出ると、TLMメンバーと手を真つ赤に染めた二人の皇女が居た。

TLMメンバーについては描写すると18禁（グロ的に）なってしまうので、一切触れない。

「あら、カズキさん。こんにちは。」「こんにちは。」

皇女二人はとても美しい微笑みを浮かべて挨拶をしてくれたが、何故か背筋にゾクゾクと寒気が走った。

「ご機嫌麗しゅう、第一皇女様、第二皇女様。」

第一皇女と第二皇女は双子で、まるで見分けがつかないが、容姿はテオをそのまま二十代位に成長させたような感じだ。

「堅苦しいですわね。もつと砕けても構いませんのよ。」  
「ええ、全くテオと話すように喋って下さいな。」

「そんな恐れ多い、訳でもないからいいか。  
といっても、明日からオスティアに行くから忙しいんだけどな。」

「それは失礼しましたわ。」

「戦争は大変ですけど、頑張ってください。」

「ああ、了解。」

「カズキ殿。」

「カゲタロウか、どうした？」

「オスティアの作戦については聞きましたか？」

「聞いてるよ。」

「それなら、急いで下さい、直に出発です。」

「作戦の開始は明日だろ？　なんでこんなに早く。」



「作戦の開始は明日の夜。つまり、攻撃の開始が明日の夜なのだから、今日中には出発しないと間に合わないんだ。」

「明日の夜に出発じゃなかったのか……」

「カズキさん。」

「はい？」

「頑張ってください。」

「はい……」

「じゃ、行きますよ。」

カゲタロウと移動用の戦艦の格納庫に向かう。

本当に準備もなにもせず、戦場に行くことになった。

オステイア

空中に浮かぶ流麗な都市オスティア。

そこを襲うのは無数の戦艦と鬼神兵。

「圧倒的な戦力差だな。」

「しかし、仕方がないことだとは思いますが、  
む、通信が……………」

『精霊砲全弾消失!』

『消失!? 王都の魔法障壁ではないのか!?  
まさか……………!』

『広域魔力減衰現象を確認! 減衰速度加速中……………間違いありません!』  
黄昏の姫巫女です!!』

「黄昏の姫巫女の情報が入りましたね。」

「ああ、どうやらあの塔に居るようだ。  
俺が行く。 カゲタロウは支援を頼む」

返事は聞かず、瞬動で黄昏の姫巫女が居る塔に移動する。

「あああああゝ あゝ あッ」

塔の中に居たのは、鎖に繋がれた女の子と三人の魔法使い。

鎖に繋がれた女の子が黄昏の姫巫女だろうが、苦しそくに声をあげている。

「なんだ、貴様は！？」

「こんな子供まで戦争に引つ張り込むか。」

ライナ然り、エヴァ然り、戦争は一番弱いものを苦しめる。

少し頭にきてしまい、つつい、魔法使い達に向かって影槍を伸ばしてしまった。

影を使い、鎖を切つてやる。

「大丈夫か？」

「ダイ……ジヨウ……ブ……？」

「黄昏の姫巫女……いや、名前はあるのか？」

「ナ……マエ……？」

「おう、そうだ。」

「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ  
ユシア」

酷く、無感情無表情で言い切るアスナ。

「そうか。俺はカズキだ。」

頭をぐりぐりと撫でてやる。

「おい、お前ら！ 興が削がれたから今日は帰るが、戦争に子供まで巻き込むな！

戦争なんてのは汚い大人の都合でしかないんだ。」

「は、はい！」

あ、俺ちよつとかつこよくない？

帰ろうとした時、ドンツと鬼神兵の一体が上半身と下半身に別れる。

「なんだ？」

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ、後は俺に任せときな。」

なんだ、この赤毛のガキは？

「お……お前は……」

魔法使いの一人が誰かわかってるようで、驚いている。

「紅き翼<sup>アラルフラ</sup>……千の呪文の……」

「そう！！」

ナギ・スプリングフィールド！！

またの名をサウザンドマスター！！」

この赤毛は馬鹿だな。

「自分で言ったよコイツ……」と、日本刀を持った男。

「フフフノリノリですね。」と、ローブを着た男。

てゆうか、俺に気付いていないのか？

「えーと……百重千重と重なりて走れよ稲妻」

あの詠唱は…雷系最大級の……

「行くぜオラアッ!!」

千の雷!!

「

中々の威力だな。大型の鬼神兵が四体やられたぞ。

そして瞬く間に日本刀を持った男が小型の鬼神兵を切り裂き、ローブの男が重力魔法で潰していく。

「おお……」

「安心しな俺達が全て終わらせてやる。」

「な……しかし…敵の数を見たのか！？  
お前達に何が……」

「俺を誰だと思ってるジジイ。  
俺は最強の魔法使いだ。」

魔法学校だきや中退だな。」

「な………」

俺を無視してどんどん進んで行くな！。

「あんちよこ見ながら呪文唱えてるあなたが言っても、今ひとつ説得力がありませんね。」

「あーあーるせーよ。  
だから中退つつってんだろ。」

「それに……あなた個人の力が、いかに強大であろうと世界を変えることなど到底……」

もう、勝手にしてるよ。

「るせーつつてんだろアル。

俺は俺のやりたいよーにやってるだけだバーカ。」

「待て、ここにも帝国の兵士がいるんだぞ!!」

あ、この爺ばらしやがった。だが、グツジョブ。

「何っ!？」

慌て身構える三人組。

本当に気付いていなかったのか。

「なんだ、てめえは!？」

「帝国の遊撃部隊長・七々己 一希。こつち流じゃ、カズキ・ナナナミだな。」

「ナナナナミですって!？」

「知ってるのかアル？」



「ええ、昔話題になった賞金首です。  
しかし、ここ百年ほど消息不明だったはず。」

「ようは、強いって事だな！」

「安心しろよ、俺はもう帰るから。」

「喰らえッ！」

俺の言葉に構わずに殴りかかってくる馬鹿。

俺はそれにカウンターで殴り返す。

「ナギッ！」

「へっ、やるな。」

殴られて鼻血を出しながらも笑う馬鹿、マゾなのか？  
「くっ、斬岩剣！」

今度は日本刀で斬りかかられる。

「はぁ……ん？」

体が重い？

重力魔法か。

だが、この程度の重力なら問題にもならないな。

指一本で日本刀を受け止める。

ふははは、今の俺は 染を超えている。

……止めよ、キャラが崩壊しかかった気がする。

「そんな……」

「下がれ詠春！ 雷の暴 つ！」

「止めておけ、こんな所で出すような魔法じゃ無いだろう。」

瞬歩で接近し、馬鹿の杖を叩き落とす。

全く、塔そのものを吹き飛ばす気が。

「はあ、動くな！」

三人の喉元に影槍を突き付ける。

「くっ……」

「ちっ……」

「おやおや……」

「お前ら、俺は戦う気はないと言っているだろ。  
無駄に向かってこようとするな。」

「無駄だと！」

「刺さるぞ？」

「おわっ！」

食って掛かろうとする馬鹿は、喉元の槍を思い出したのか下がる。

「今は興が乗らねんだよ。」

次に戦場で会ったら遊んでやるよ。」

話すことも無くなったので、帝国の艦隊に戻る。

途中、カゲタロウを見付けたので拉致って戦艦まで戻った。

「何故、私を連れてきた？」

「良いじゃねえか、補佐官。」

「私がいつそんな役職に就いた。」

「部隊長権限でついさっき。」

「はぁ……」

いろいろ諦めたような溜め息を吐くカゲタロウ。

「でも、今回は拉致られて正解だったと思うぞ？」

「な」

カゲタロウが何か言おうとした時に、ズグアッ！と特大の雷が帝国

の艦隊を襲つ。

「な、また“千の雷”か!？」

「黄昏の姫巫女がいた塔に術者は居るが、この戦は引いた方が方が良いな。

カゲタロウ、艦長に連絡。

他の部隊にも連絡して撤退するようにしろ。」

「了解だ!」

戦艦の中に走るカゲタロウ。

「紅き翼か……才能は認めるが、まだまだ甘いな。」

次に会うときは、もっと楽しませてくれるかな？

まあ、今はそんなことよりも、

帰った時になんて言い訳しよう……

皇帝もテオドラという小さい娘が居るし、あんな子供が戦争の兵器に使われていると言ったら納得させられるよな。

バキュ！

あ、この戦艦が被弾した。

この攻撃はあのローブだな。

あゝあ……こりや墜ちるな。

「カズキ殿！」

「おう、カゲタロウ。連絡は終わったのか？」

「そんなことよりも船が！」

「ああ、墜落は確実だな。」

「落ち着いて言わないで下さい！」

「お前も結構余裕あるよな？」

「……………」諦めた。

帝国に帰るにはしばらくかかるだろうな。

墜落。

## 第十八話（後書き）

第一皇女と第二皇女は適当に考えました。

原作のテオドラを想像してくれたらいいと思います。

紅き翼が登場しましたが、あんな扱いですいません。

次回は少し、日常を入れて、グレートブリッジまで行こうと予定しています。



## 第十九話（前書き）

オスティアで紅き翼に敗れたその後です。

一希達は一体どうするのか！

まあ、戦闘もなく、なんともない話です。

## 第十九話

鬱蒼と繁ったジャングル。

ここは、ウェスペルタティア王国の西、ギリギリ帝国の支配権に入るか入らない所。

そこに集まるのは、先日、王都オスティアで戦艦を墜とされた我が遊撃部隊総勢五十名。

「なんとかここまで来たけどよ、ここからどうするよ?」

俺自身は、瞬間移動でも何でもすればいいが、流石に一個部隊丸々移動させるのはしんどい。

「一先ず、何処かの拠点にでも戻れば。なんとかなるのでは?」

ジャングルでの敗走生活で、俺の補佐役がすっかり板についてきたカゲタロウ。

「拠点までの移動時間は?」

「予測ですが、障害が何もないければ二日程ではないかと。」

「二日か……ここからは魔法も使えるが、それも含めてか？」

「含めてですね。」

「ジャングルでは魔獣の類いも考えられますので、魔力の消費は押さえた方がいいかもしれませんが。」

「そうか……なあ、転移で一旦帝都まで戻って報告してきて良いか？」

「ついでに救援も頼んどくからさ。」

「……………転移が出来るなら、最初からそうしろー！」

「いや、俺、一人だけだぞ？」

「流石に五十人も転移させるのはしんどい。」

「結構距離あるし。」

「だったら、カズキ殿は拠点まで影の転移門を作ってください。」

「遊撃部隊には影使いが私の他に17人はいますので、その全員が協力すれば部隊丸々転移するまで維持出来ると思います。」

「そんなこと出来るのか？」

「転移で難しいのは、確実に転移門を作り出すことなので、それをやってもらえたら、維持する位は出来ますよ。」

「分かった。」

少し地図を貸せ、座標を特定する。」

「どうぞ。」

拠点の位置が分かれば、後は勘でなんとか……

「よし、大体分かった。」

とりあえず、一人で行って大丈夫か確かめてみるから、少し待ってろ。」

もし、失敗して壁に埋まるとかなったら洒落にならない。

「転移 到着。」

うん、大丈夫だな。じゃまた、転移 到着。

向こうも大丈夫だったから、広げるぞ。」

「了解。」

影使いは準備しろ。」

この間30秒。

あっという間に部隊の撤退が完了した。

そんなこんなでここは帝国の拠点の一つ。

町からは適度に離れていて、民間人にちゃんと配慮がなされている。

あの皇帝はあんなだが、こういうことはきっちりしているから、人望もあるのだろう。

さて、俺はと。

「カゲタロウ、俺は帝都に戻る。部隊の奴等には適度に休んでから帰還するように言っておいた。

あ、お前も付いてこいよ。」

「は？」

ガシッ、とカゲタロウの肩を掴んで影に沈んでいく。

「ちょ  
」

「おつす、皇帝。

七々己 一希、只今帰還しました。」

「  
つと、そんないきつ！ 皇帝！？」

慌て、片膝をついて頭を下げているカゲタロウ。

カゲタロウは皇帝と会つのは初めてなのか？

俺？ 俺は普通に立ったままだぞ。

「おお、ご苦労、と言いたい所だが、敗けたらしいな。」

「おう、敗けた敗けた。面白い位に敗けたよ。戦争にはな。」

「何やら含みがありそうだが、深くは聞かないでおこう。  
それで、そこな黒いのは誰かな？」

「わ、私はボスプラスのカゲタロウとも「ようは、俺の補佐官みた  
いなもんだ。

そこそこの実力者だぞ。」

「ほう、それはまた面白い。  
で、カズキよ、何故お主がいながら此度の戦は敗れたのだ？  
深くは聞かないと言ったが、少しは話しても良いだろう？  
報告では大呪文の連発だとか、鬼神兵が斬られただとか、信じられ  
ん事が多くてな。」

目を真剣なものにして尋ねる皇帝。

「えーとだな、オスティアにいた爺が言うには“紅き翼”とかが来  
て、千の雷を放ってで、鬼神兵や戦艦が潰された。  
簡単に言えばこうだな。」

「カズキ殿、少し簡単過ぎるのでは？」

「そうは言ってもなあ……あ、サウザンドマスターとか云う奴は、  
千の雷五、六発撃てるぐらい魔力あるぞ。  
他にも、鬼神兵を斬る侍とか、重力魔法を使う奴もいたな。  
あいつらは俺以外が相手取るのは無理だな。無駄に犠牲者を出すだ  
けだ。」

カゲタロウクラスが二桁程で足止めがやっとな。」

「分かった。そいつらの特徴は？」

「リーダーみたいな奴は赤毛のガキ。後、二人は両方黒髪で一人は

野太刀、これの長いのなら。を持っていて、もう一人はいかにもみ  
いなローブを着ていた。

「

「そうか……最後に一つだけ。

黄昏の姫巫女は「却下だ。」まだ何も言っていないのだが……」

「何にせよ、あんな子供を戦争に巻き込むのは気に食わない。  
ただでさえ、変な呪いを掛けられているのに、これ以上は巻き込む  
べきではない。」

「優しいな。」

「甘いだけだ。」

少しだけ、旧世界の日本に残してきた娘を思い出したただけだ。

「ふう、もう下がって良いぞ。」

「ははっ「さっさと行くぞ」「ぐえ。」

謁見の間を出て、自室に向かわずに鍛錬場に向かう。



「カゲタロウ……しばらくの間……次の出撃があるまでお前を鍛える。」

異論はあるか？」

「え？ 私は疲れているのだ」よし、分かった。最低でも紅き翼相手に時間稼ぎ出来る位には強くしてやる。」私の意見は？」

そんなもんあるわけないだろ、形式上一応聞いたただけだ。

ふふふ、いよいよ、俺にも影使いの弟子が出来たな。

影魔法を究めたのに、誰にも継承出来なくて気に揉んでいたのが解消されるな。

やっぱり、どんな技術も誰かに継承したくなるものだな。

よしんば、それが俺を超えることになれば、まだまだ究める事が出切ると云うことだ。

「くくく、幾つになっても弟子を育てるのは楽しいものだな。」

「（私の人生はこの人に出会った時点で詰んでいたのかもな。）」

おや？ 何故だかカゲタロウから哀愁の空気が漂っている気がするぞ？

まあ良いか。

そして、鍛錬場に到着する。

「さて、それでは地獄じごくを始めようか。」

「……………」 諦めた

そのしゅぎょうを見ていた兵士達は後々「あれは人間業じゃない。悪魔の所業だ。」と語っていたらしい。失礼な事だ。

## 第十九話（後書き）

魔法世界での実際の敗走でどんななんでしょうかね？

魔法を使えば補足されるでしょうし、転移付は高価なものらしいですし。

やっぱり、地味に走って逃げていたのでしょうか？

さて、カゲタロウの強化が始まりました。

原作ではどのような強さになってしまうのでしょうか。

こっご期待。

カゲタロウを優遇し過ぎかなあ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6856y/>

---

葱間・トリップ

2012年1月10日22時51分発行